
騎士と鈍感っ子（仮）

広い世界にちっぽけな人間。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士と鈍感っ子（仮）

【Zマーク】

Z8580W

【作者名】

広い世界にちっぽけな人間。

【あらすじ】

急に異世界とりつぶしてしまった「篠原凜」は膨大な魔力を有していることがわかる。しかし、最初に言葉が通じなかつたせいで男装をするはめに・・・

設定（前書き）

と言つ名の作者の忘備録。
読まなくとも大丈夫だとは思います

設定

『魔術』

術者の魔力を動力とし、精霊に陣や、詠唱を用いて意志を伝えることによつて発動させる。

また、術を使つた際には余波的な魔力が放出される。
(この制御が長期戦では鍵となる)

力のあるものであれば、陣や詠唱を用いとも、「想う」『イメージする』ことによつて発動させることができる。

・無詠唱

陣や詠唱を用いずに術を発動すること。

力の強い、もしくは精霊に好まれている者が用いる。
集中や「想い」が足りなかつた場合、イメージと違つ術が発動されることが多い。

『魔力』

殆どの人間が有している。

その中でも魔力を扱うことが優れたものが魔術者となる。
術者でなくとも、一般人でも感じることはできるが、あくまでぼんやりとしたものでしかとらえることはできない。

また、所持する大きさは一般的に生涯変化することはない。

『精霊』

精霊界、もしくは地上に存在する。

人間のことを見下す存在としてみている。

力のあるものは人間界の歪みを正す働きを持つ者もいる。
多くの精霊は自然に働きかけ、活動を促す。

術師に力を貸すのは、陣や詠唱に抗えないようにするものが含まれ
ているためである。

心根の奇麗な者を好み、術を使つ際にもほかの術者に対しても、
大きな力添えをする。

- ・低級精霊

一番位の低い精霊。

力はあるが、気の赴くままに活動する。

精霊獣として召喚されても、強制的に解除されることも多い。

- ・中級精霊

一番目に位の低い精霊。

術師の欲するものを理解できるが、会話をするほどの中能はない。
だが、精霊獣となつた際には、力は精霊時に所持していた力の半分
となる。

- ・高級精霊

一番目に位の高い精霊。

自我があり、自ら進んで働きかけることもある。

精霊獣となつた際にも力は変わらず、いくまれに増えることもある。
田の色は金色となる。

- ・王

一番位の高い精霊で、数も数えるほどしか居ない。

契約にも気の向いた時のみ行うため、存在 자체があまり知られていない。
(他の精霊は召喚されれば拒むことはできない)

力を段違いに所持しており、高級精霊の十倍以上を有する。

精霊獣時に入型をとることができるのはこの位だけである。

(しかし気に入った者にしか見せる)とはない)

目の色は金色となる。

『精霊獣』

精霊が術者と契約し、実像化されたもの。

術者の力の大きさによって、召喚される精霊の位が決定する。

一般的には術者に生涯付き添うが、強制的に解除されることもある。

通常は幼少時に契約を行う。

また、契約主とは離れていても会話することが可能。

術師の体には、精霊の印が契約時に彫られる。

召喚主は獣の瞳の色の石のついた腕輪を、獣は召喚主の瞳の色の石のついた首輪をつける。

この輪は術者の身分証明の役割も果たす。

術師に反抗し、暴走することもある。

殆どの場合、召喚獣の暴走を防ぐため、拘束魔術—『縛る』が義務付けられているが、高級精霊と「王」にはその限りではない。

『魔獣』

魔力を持った獣。

基本的には森深くや、人の近寄らない谷底などで暮らしている。

時々人里に出てきて侵略行為を行い、人を屠る。

そのような場合や、力の強すぎるものについては騎士団が捕獲に向かう。

『石』

主に術者のつけるペンダントップのことを示す。
力の強さによって種類が違う。

- ・貴水晶
別名「神の涙」。
最高ランクの術者が持つ。

設定（後書き）

隨時追加していくきます

1（前書き）

処女作です。駄文です。筆者のかぎな要素でんこもりでかいてみました。

感想などいただけると泣いて喜びます。

「……………」「……………」

と、座り込んでテソプレートな発言をするのは、
「ビリに」でも「る」、「いじへ普通の」女子高生、篠原凜だ。

こんなはずではなかつた。
と凜は考える。

時は一時間前に遡る……

* * * * *

「……………凜様……………」「……………」

「ああ、また。」

そう答へ、僅かにほほ笑むと、遠くで黄色い声が上がる。
別段、そのようなつもりはない。
し、そのような趣味もない。

が、いじの「篠原凜」という女は男にみられる。

「いいのよ、凜は一男は男でも『美少年』だから……」
と中学からの親友は力説するが、フォローの出し方を間違えている。

確かに、いじの容姿は男に間違えられても仕方がない。

髪はグリースペードだし、身長も一七〇センチにもならないこと多い
じゅうまい。

中高一貫の、この女子高に男がいるはずがないのだが、
凛は毎日のように告白を受け続ける。

この容姿が気に入らないわけではない。
だが、勇気をだし、精いっぱいの思いを凛にぶつけてくれた子
たちに対して申し訳ないのである。

「やうこつ子は現実を見て強くなつてこゝのよー。」

・・・また、フォローの出し方を間違えている。

訂正するのも疲れ、早々に帰宅しよつと考へる。

廊下を歩けば、熱い視線が突き刺さり、
数少ない知り合いに声をかけよつものなり
周りにいた子が倒れる音が聞こえる。

そんな、一風変わつてはいるが、凛にとっては「常」が
いつものように通り過ぎてこくはずだった。

途中で雨が降り出す。

雨に濡れながら歩くのは嫌いではないが、今はまづい。
風邪気味のこの体に鞭打つてまで楽しむほどの趣味ではない。

「ヤバいな・・・」

雨脚が強くなり、そんなつぶやきが零れる。

そろそろ走りうかと思つていたとき不意に田の前が真つ暗になり、
・・・光で何も見えなくなった

* * * * *

そして、今に至る。

首筋には冷たい感触がして、動けば ちり、と僅かな痛みがはしる。

後ろに感じる殺氣をそのままこもじておけず、
ゆっくりと振り返り、上をみあげる。

後ろにいたのは「超絶」がつくであろう顔の整った御仁である。

深緑色の髪に、筋の通つた鼻梁。

灰海色の瞳は強烈な意志を持つてこちらを見つめていた。

——きれいだな、この人も女の子に騒がれるのかな

と、命の危機が迫つているらしい

この場には似合わぬ感想を抱いていると、何か叫ばれた。

「○ × # \$ % & · @ - ! ?」

「え・・・?」

何を言つてゐるのかわからない。

ひどく怒つてゐることは表情から感じられるが、言葉が通じない。途端に恐怖がこみ上げる。

「 \$、○ × # \$%& ; @ ! ? - ?」

「なにを、いつてゐの・・・」

呆けた様子の私をみて、向こうはすっと剣をひいて、後ろに下がった。

「 \$ % ○ × \$ # & . . .」

何かをつぶやき、そのまま大きく剣を振りかぶる。

「ひもわかんないようなじりで、死ぬのはいやだな」と思いつつも、凛は静かに目を閉じる。

・・・が、一向に衝撃がこないのを訝しく思い、目を開ける。

どうやら男はもう一人いたようだ。

こちらの男も美形である。

白銀の長髪で、細目でほほ笑んでいるために、目の色は分からぬ。

「 # * @ + -」

間延びした声で、先ほどの男を止めていたようだ。

「 ○ × ! ? ！」

口論をきいていたが、元気になつてきた。

ああ、風邪、もつとしっかり治しておけばよかつたな
と凛は思い、意識が遠くなつていく。

最後に見たのは驚いた様子の二人の男の目だった。

「おー、帰るぞ。」

「えーもつ少し居ようよ、
帰つてもどうせあのつまんないやつでしょ？」

「・・・サボるな。」

バレた？

と悪びれずに笑うのは俺の弓のパートナーだ。

王国騎士団では、「弓」「剣」「魔術」の三部署の新人から一人づつ選び、パーティーを組ませる。

多種多様な任務にもこのパーティーで取り組む。

組む目的は「お互いの長所を生かし、

任務遂行をより確実なものにする」ためであるらしい。

しかし、俺たちのパーティーには魔術師がいない。

通常、パーティーは各自の力量を考慮し、組まれる。

しかし、俺たちの場合、俺たちに見合つ魔術師がいなかつた。

俺は傲りや自己陶酔ではなく、自分のことを強いと自負している。
それはこのパートナーにも言える。

弓の腕は確かだ。俺のパーティーに選ばれるくらいなのだから。

しかし、この性格には辟易する。

鍛錬はサボろうとするし、
女を見かければ誰それと構わず声をかける。

女は苦手だ。

厚かましいし、直ぐに泣く。

些細なことで怒り、喚いて己の正当性を主張する。

魔術師が女だったら

そんなことを考え、一瞬鳥肌がたつ。
だが、騎士団には女は入れない。
あの医者でさえ男なのだ。

そのことを思い出し、安心する。

と、

爆音がした

とも考へることができないほどのぐに、
膨大な魔力を感じた。

思わずパートナーと目を見合させ、馬を向かわせた。

そこにいたのは、一人の人間だった。

* * * * *

これほど強い魔力を持つた魔獸でもあつたならば殺さなければならぬため、些か安心して呼びかける。

魔獸とは、魔力を持つた獸のことである。基本的には森深くや、人の近寄らない谷底などで暮らしている。だが時々人里に出てきて侵略行為を行つ。しかもそれは生きるためではなく、楽しみのためなのだから、性質が悪い。

「おい、そこのお前。」

人間は座り込み、静かに佇んでいた。
まるで神聖な、森に守られているかのような、そんな印象を受ける。
だが、そんなことはあるはずはない。

「おい！聞いているのか！」

威嚇の意味も込め、馬を飛び降りて首筋に剣をあてる。

ふ、と空気が変わり、人間がゆっくりと振り返つた。

吸い込まれそうだ

時間が止まつた気がした。

そこにあつたのは零れ落ちそうに大きく見開かれた漆黒の瞳。

一瞬でも体が思い通りに動かなかつたことに驚き、苛立つ。いくら少し気の抜けた状態だつたとはいえ、

戦いでは「一瞬」で命運が決まる。

そのことはよく分かつていいつもりだったが。

「このよつな少年に氣圧われるなど・・・

『氣を取り直し、更に強い調子で問い合わせる。

「お前どこから入ってきた！？」

「ここは騎士団管理の進入禁止区域だ。

こんなひ弱そつなのが簡単に入り込めるような場所ではない。

「答えろー。」

ぱちぱちと瞬きがされる。

動きのなかつた瞳が揺れて、

今まで澄んでいたのに恐怖の色で染まっている。

「そんなに脅したって答えられないだろー？」

パートナーが茶化すように話しかけてくる。

「だが、ここに居る時点でおかしいー。」

「落ち着けつてー。」

普段は受け流せるパートナーの態度にも、

帰れないことにも苛立つていた。

どれもこれもお前のせいだ、と少年のまつを覗やる。

ゆっくりと倒れるのが見えた。

「 「？」」

何かしてしまったかと慌てるが、
気絶したふりをしているだけかもしれない。
警戒を解かぬまま近づく。

少年は短く荒い息を繰り返していた。

「おー」

呼びかけるがピクリとも動かず、額に手をあてると酷く熱かった。
力の抜けた体を此方に預けてくる。
このような間諜や刺客は居ないだろ？
何より殺氣というのか、身のこなしと言つのか。
それが素人であることを明示している。

「ちつ・・・しじうがない。持ち帰るぞ。お前連べ。」

「えー荷物が多いし、無理だよー」

確かに見ればパートナーの馬には多くの積荷があった。

「くそっ」

ひざ裏と背中に手を回し、持ち上げる。
少年は驚くほどに軽かった。

しかし、意識を失つても、
未だその体に宿る強い魔力は感じじことができた。

一体何をすればこのようになるのだろうか。

「人間」という種族の器におさまる魔力は限られているはずだ。

「戻るぞ。」

「はーいはー

面倒なものを拾つてしまつた

その時には俺にはその程度の認識しかなかつた。

2 (後書き)

9 / 25 誤字(?)訂正

「おかあさん？」

「大丈夫よ、凜。すぐここ、すぐにお迎えに来てあげるから」

温かな手が頭を撫でる。

顔を見ようとすると、ほやけていてよく見えない。

「うんー。うん、ここに来てまつむー。」

「あうよ、いこ。」

その人は、そこって足早に去つて行つた

「 × ー？」

「 み へ。」

意識が浮上した。
誰かが話している。

「 ○ 、 \$ ー？」

「 ー ー

額に冷たいものが触れる。

そのことではっきりと田が覚める。

部屋の光が眩しくて、凜は田を瞬かせた。

「%○、 @ ?」

「 。 #」

「え？ ちゅう？」

状況確認もしようと、力の入らない腕を支えにしながら体を起しす
と、

短髪の人と目が合う。

途端、急に腕をつかんでどこかへ連れて行こうとする。

「あ！」

「〇ー、ー！」

当然、とにかくべきか、立ちくらみがして倒れこんでしまう。

凛をベッドに寝かせなおしてくれた人は、

同性の私でも思わず見惚れるほどの美人だった。

・・・もちろん、私よりも体に凹凸があるのはいうまでもない。

「 @、ー！」

女人人が一人に向かつて何か叫び、ドアのほうを指さしている。
どうやら、この部屋からでていけといった意味のことと言つている
ようだ。

短髪の人は不機嫌に、足音高くでていったが、長髪の人はこちらを振り返り、満面の笑みで手を振った。

しかし、この笑みには何故か本能で危険を感じた

日本人の特性というべきか、

つい愛想笑いを浮かべて反射で手を振りかえす。

それをみて、満足そうに去つて行つた。

「○」「

声を掛けられ、女人の存在を思い出す。

姿をよく見ると、何故か、手が光っている。

「なにそれっ」

思わず逃げ場のないベッドの上で後ずさる。女の人は眦を下げ、なんだか困った様子だ。

身振り手振りで何かを必死に伝えようとしている。何をするのか不安は残るが、

身に危険が及ぶようなものでもないようだ。

しかたなく、女人のほうへと向き直る。

女人人が凜の頭に手を翳す

「んん！？」

頭の中がかきまぜられていくよつた感覚がある。
しかし、不快ではない。

揺りおがおやまつ

「私の言つてゐる」とわかる？少年？」

「・・・はい？」

「「」あんねーそつなの、女の子だつたのねー」

今さつきのは「魔術」らしき。

「黒魔術」や「鍊金術」は地球でもあつたが、
実際に成功することはなかつたし、
あのように汎用的な使わわれ方をするものでもない。
森の中でも感じていたが、

どつやらこには地球ではない場所

異世界・・・。

「別にいいですよ・・・」

男に見られるのは慣れていた。が、

「女の子の体とは思えなくてー」

「・・・やつですか。」

面と向かっていつも言わるとへしむ。

女人 ミーナさんとつお医者様兼魔術師らしい の話によると、

こいはこの國の騎士団の本拠地で、

私は「不審者」として運び込まれた。

(王国直轄地の森に厳しい警備の田をかいぐべつて居たから)
しかし、誠意を示し、力量があれば入隊も認められる。

ちなみに、入隊以外の道は ない。

ここにこのような形で入った以上、こいからでは「騎士」と
してか、「死体」としてからしい。

だが、寝食が保障され、稽古もつけてもらえるらしいこの場所は、
此方側の世界には行く当てのない凜には最高の場所だ。

「でも、困ったわねー」

「何がですか?」

「この騎士団には女の子は入れないのよー」

「・・・え」

入る気満々であつた凜には寝耳に水である。
それでは目の前のお方はどうなるのだろうか

「・・・じゃミーナさんは「男よ」はい!?」

洗濯や、ベッドメイキングをするメイドさんなどで例外はあるが、

医者も軍医として命まれたため、男でなければなれっこそつだ。

「だから男って言ひてんじやないー　何度も言わせなこで」

ミーナさんは唇を尖らせる。

「こんな表情でも美人だとわまになる

じゃなくてー

「どうしましょうか・・・」

「やうね・・・」

ミーナさんはいつもむべりがつて悩んでこの

「男装ね。」

「え？」

「男装よー、やうよ、やうすあればいいんだわー。」

悩んでいたから何を言ひ出すかと思えば・・・

ミーナさんは目を輝かせて私を見る。

「魔術を掛けるとばれるかもしねないから・・・さう・・・あの

一人には・・・」

「み、ミーナさん・・・」

考へてくれるのやうれしいのだが、

自分の世界に籠るのはやめてもらいたい。
遠い田をしてなにか呟いているのは、怖い。

「あー、『めんなせ』」

ミーナが遅つてきたようだ。

勢によく立ち上がり、『ミーナ』と名を出しの中を漁つていたかと思つて、幅の広い布を取り出す。

「これは・・・さうし。ですか・・・」

凛には必要ない氣もあるが一応受け取つておぐ。

「ええ。向にもしなこのも心細いでしょ?」

「あ、あっがと!『めんなせ』」

「あのー、」

「・・・なんで、ミーナさんせそんなに私によへつてくださいんですか・・・?」

「気に入つたからよー そんなん決まつてるじゃないー!」

ミーナさんは凛の背中をバシバシと叩く。

女人に見えるとはいって、ミーナも男なのだから。

凛の背中を叩く力は相当なものだ。

「うー、けほつけほつ」

「あー、『めんなせ』?」

この笑顔とこのセリフ、デジャヴだ・・・。

若干顔を引き攣らせながら 構いませんよ と凛も返す。

「まだもう少し休んでいたほうがいいかもしないわね」

先ほどまでの出来事で忘れていたが、
言われてみれば体の芯がまだ重い感じもある。
言葉に甘えて、再びベッドへと横たわる。

途端に睡魔が襲つて、瞼が重くなる。

「起きた時につてを紹介するわね」

「は、い・・・」

凛が完全に眠りについたのを見てからミーナは考える。

(あの魔力、尋常な量ではなかつた)

運ばれたとき、凛からは通常の人間の10倍以上にもなろうかといつ
魔力が見えていた。

通常、人間はその種族上うけられる魔力量は少なく決まっている。
凛の魔力量は、その此方の世界での人間の量を、遙かに超えていた。

「面白いことに、なりそうね・・・」

魔術師の呟きは誰にも聞かれることなく、
静かに空気へと溶けて行った

「『めんね、凛ちゃん。起きて』

「んー、あと『ふんー・・・』

居心地の良い場所から引き離されるとする手から、逃れるように寝返りを打つ。

しかし、これは誰の声？

霞がかつた思考が違和感を伝える。

ん？ じこひて

凛はぱつと布団をはねのけた。
目に入るのは、いつもの見慣れた自分の部屋。
ではなく、清潔感あふれる白塗りの壁と、ベッド。

「起こして『めんなさい』？」

の人、気の向いた時でもないと『諒』してくれないのー」

「ハーナ、さん。ですよね・・・」

そういえば、

と昨日のこと思い出す。

気が付いたら森のような場所にいたこと
そこで剣を向けられたこと

不意に、元の世界と友達のことと思い出し、田頭が熱くなる。
もづ、「一度と会ひ」とも出来ないのだろうか。

でも

「ここに来た理由も、どうすればいいのかもわからない。」

だが泣いて事が変わるわけではない、というのは身に染みていく。

「あら、やっぱりもう少し寝ていたほうがよかつたかしら」

ミーナが心配している。

昨日は元気に振る舞えていたが、今は疲れているせいか
感情が外に漏れていたらしい。

「いいえ、大丈夫です！」

凛は、自分の弱気を吹き飛ばそうともするかのように、
笑って返事をした。

* * * *

「それで、今からどこにいくんですか？」

二人は部屋を出て、今は廊下を歩いている。

その前に、凛の着替え時に他の医者が入ってきたそうになつた
ハプニングはあつたが

あの時には一人で大慌てで食い止めた。
見られでもしたら凛には後がない。

(にしても、この世界の人はみんな大きい)

元の世界では背が高いことを自負していた凛だが、
それ違う人は一様に背が高い。

もちろん、女性も例外ではなく、

先ほどの人は2メートルはあつたのではないだろうか。

(食べ物とか、気候の影響なんだろうか)

しかし、背の高さだけではなく『発育』もよいようで、
(あんなのが普通なら、少年に見られても仕方ないか)
と凛は自分の貧相な体を見下ろしながら一人ごちる。

「んー、そうね・・・あの人のことなんて言つたらいいのかしら」

「あの人?」

「凛ちゃんは、その腕じゃ『剣』も『弓』もできないでしょ?
だから、『魔術師』になるのがいいと思うの」

なるほど、その通りである。

すれ違う騎士らしき人物の腕は、筋肉がつき、
太さは凛の太ももと同じくらいはあつた。
きっとこの世界の人間が成長が早いとはいえ、
きっと計り知れないほどの努力をしてきたはずだ。

「そうですね。それで、『あの人』のところに行つて
何をするんですか?」

「それは、人によつて違つから一概には言えないのよ・・・ほら、
ここよ」

話しているうちに結構な距離を歩いていた。
着いたのは重厚な木製ドアの部屋。

飾りはなく、簡素ではあるが位の高い人物の部屋だと思われた。

「頑張つてね」

扉が開く。

「誰じや？」

振り返つた人物は、盲目の老人だつた。
気が付けば、扉はすでに閉じられていた。

「篠原凜、と申します・・・」

『氣品』とでもいつのだらうか、老人から滲み出でくるものに圧倒
される。

内装を確認する余裕さえなく、
震える声で名前を告げるので精一杯だつた。

「いひちに来て座るがいい」

言われるままに椅子に座る。
視界には老人しか入つてこない。

「ミーナから話は聞いておるかね？」

「人によつて違つ、とだけ。」

「ふむ。さうじやの。君にはこれがいいのではないか」

差し出されたのは手のひらに載るほどの水晶玉のようなものであった。

部屋から差し込む光によつて、何色にも変わるそれに、凛は思わずほう、とため息をつく。

「これを手の上にのせて・・・」

「目を閉じて、その珠に想いを籠めてみなさい」

ころんと手の上に乗せられる。

見た目に反し、ずつしりとした重さを手に伝えてくる。

圧倒され、緊張しながらも、目を閉じて手のひらの珠に集中する。

「おお・・・これは・・・」

老人の声に目を開けると、先ほどまで部屋には居なかつた人々が
凛の周囲にほほ笑みながら佇んでいる。

その全員が凛を慈愛に満ちた目で見つめ、不思議な動作で踊りだす。

薄い衣を翻し、舞う。舞う。舞う・・・

手元の珠を見ると、強い光を発して輝いていた。

その光景に混乱し、思わず珠を取り落す。

床にここんと落ちる音と共に光と人々は名残惜しそうに消えてい
つた。

「あの、今のは・・・?」

「精霊たちじや」

老人はよほど感動したのか、見開かれた目から雫を溢す。そのまま老人は静かに語りだす。

老人の話によれば、

凛の珠の光の強さは王国お抱えの魔術師にも匹敵するらしい。
現された精霊の数は

これほどまでに多くの精霊をみたのは久しぶりだとか。

現れた精霊は皆、王レベルのものばかりであつたのだが、
凛はそれを知る由もない。

魔術と精霊術は今は同一視されているが、本来は個別のものであり、
両方の均衡が保たれていればいるほど力の強い魔術師になれるとの
こと。

「君は、きっと、きっと良い魔術師になれる」

老人は凛の手を握り、涙を流しながらそう繰り返す。

「・・・これで、わしの役割はおしまいじゃ」

「自分の魔力について聞かれたら、これをおみせなさい」

老人が手を振ると何も無い場所からペンダントがでてくる。

「きれい・・・」

思わずそんな言葉が凛の口から零れる。

それは銀の鎖に石のペンダントトップが一つという
シンプルなものであつたが、石の色に目を引かれた。
それは、先ほどの水晶玉と似ていて、
何色ともいえる不思議な色合いをしていた。

首にかけて、皿の前ににがれせみ、揺れてきらりと光る。

「//ーナにも宜しく頼むぞ」

老人は扉のほうを指しながら言つ。
時間だということなのである。//

凛は出て行こうとして立ち止まつて尋ねた。

「あの、お前を向つても？」

「やうじやな・・・わしは『守り人』とだけ呼ばれてゐる

「・・・ありがとうございます」

部屋を出していくときには、凛の皿はこれから希望を含んで、
強く輝いていた。

ミーナさんは扉のすぐ傍で待っていてくれた。
凛の姿をみつけ、優雅にほほ笑む。

が、胸元のペンドントに目線が行き、僅かに柳眉がよせられる。

「それはしまつておいた方がいいわ、リン」

「は、はい」

一体これがどんな意味を持つというのであるつか。
疑問に思いながらもシャツの中へとしまいこむ。

ちなみに今の凛の格好は男子の制服のようなものだ。
白いワイシャツに、黒のズボン。

しかし、革の編み上げブーツであること、生地が上質とうかがい
知れるものであることが、制服とは一線を画するものであることを
示していた。

し、視線が痛い

『守り人』のところへ行き、緊張が和いで、
周囲を落ち着いて見る余裕ができていた。
だが、それと同時に周囲から向けられる視線にも気づくことなる。

すれ違うたび、人々 特に、何故か女性から の強い視線が
向けられるのだ。

「ハ、ミーナさん、早く戻りましょう」

高校の女の子たちからの視線には慣れていたが、ここでの美形な人々に、

物珍しそうな目で眺められると落ち着かなくなるのだ。

第一、自分のような平凡を地でいくようなのが、
このような場には似つかわしくない気がする。

ミーナは、隣で焦ったように速足で歩く隣の少女

否、少年を見やり、小さくため息をついた。

凛は人々が物珍しさから自分を見ているのだと思っているのだろう
が、
それは違う。

凛は実際田をひく。

しかし、それはいい意味でだ。

しみひとつない陶器のような肌、

短くとも縄のようなさわり心地を連想させる髪、けぶるような瞳。

小さく整った顔に、華奢な長い手足。

しかし、一番田を引くのはその田だった。

少し切れ長な、しかし大きな瞳はこの国では珍しい漆黒で、
性別に関わらず人を引き付ける強さと美しさを秘めていた。

周囲の人間が放心状態に落ちるのをみて、ミーナはしばしの間楽し
んだ。

(だが、)

とミーナは笑みを消し、真剣に考える。

凛が守り人からもらつた石は、貴水晶だ。
見たときには思わず息を呑んだ。

貴水晶は「神の涙」とも呼ばれるほど希少で、魔術師の力を表す石としては最高ランクにあたる。貴水晶持てるのは、この魔術が盛んなこの国でも10人に満たないのではないだろうか。

この細身な少年に受けた困難を思い、ミーナは再びため息をついた。

でも、今は私ができる」としてあげたい

そんな思いで少年の後を追つた。

* * * * *

「本当はね、印や呪文を覚えて使うものなのー」

「やつぱり・・・

(どの世界でも、やはり勉強や、努力は必要なのか)

「でもね、あなたの魔力なら大丈夫だと思つわ」

今一人はミーナの執務室におり、凛はミーナから魔術の手ほどきをうけていた。

勿論、元の世界では魔術は小説やゲームの中のことであつたため、凛は興味津々である。

「魔術は『想う』ことが大事なのー」

「私がやってみるわね」

ミーナが何かを包み込むようにして両手を丸める。

「わあ・・・」

途端に温かなやわらかい光が手からもれだす。

「やつてみて?」

凛も、同じように手をだし、田を瞑つて思いえがく。

手から光が溢れ、優しく一人を包み込んでいる情景を

田を開くと、球状になつた光が一人を包んでいた。

「「「」」

凛だけではなく、ミーナも驚きを隠せなかつた。

(貴水晶をもつだけのことはある。か・・・)

「リン、もういいわよ、術をやめて」

術を止める時には、止まるように願うと先ほど教わった。

光を散らすように手を振ると静かに、流れるように消えて行った。

「ふう・・・」

初めて使つたこともあり、緊張していたのか肩の力が抜ける。しかし、倦怠感や疲労感と言つた類のものは感じられない。

「・・・リン」

そのまま騎士団や、魔術についての基礎事項を教わっていたが、今までのからかうような表情はなく、改まつた様子のミーナに、凛も思わず背筋を伸ばして対峙する。

「あなたに、私が教えられる」とはもつないわ

「え・・・でも・・・」

そうはいっても、凛はこの世界の初心者だ。

それに、我儘だとはわかっているが、まだまだミーナに傍にいて欲しかった。

「基礎を確認しよつと思つたのだけれど、必要ななかつたわね」「大丈夫。これから入る騎士団でみつちり教えてもらえるわ」

不安そうな凛にウインクがとづぶ。

「せう、ですか・・・」

「それじゃ、早速おののおやじのところに行きましょー。」

「あ、おやじー?」

「せう。あんなのにリンを任せたくないんだけど、誰がおやじだ

「ひやつー?」

「あらー 手間が省けたわ」

気配を消していたのか、凛が気づかぬうちに扉の内側には一人の男性がもたれかかっていた。

手は節くれだち、鷹のよつな鋭い相貌を持ち、本当に・・・

「・・・魔術者なんですか?」

言った瞬間にぎろりと睨まれ、口を手で押さえるが、時すでに遅し。標的は凛へと変わっていた。

「なんだ、こいつは

「ねーリンもそう思うわよねー

「こんなんだけど、魔術師団の団長なのー」

睨まれてもミーナは平然として凛に話しかけてくる。その精神力は見習いたいが、空氣を読むといふことを

ミーナは知らないのだろうか。

日本人の凛としては、ぜひその技術の習得をお勧めしたいといふのである。

「だつ、だんちょー・・・」

騎士団の中の称号や、仕組みについては先ほど軽く教わっていた。
団長といえば、騎士団の各部門での一番の「お偉いさん」である。

すなわち、この国でそれに一番精通している人間
恐怖の目で、姿をもう一度確認しようとする。
が、未だ睨まれていてことに気づき、慌てて田線を戻す。

「このはねーリン。

新しく騎士団に入れてもうひとつ迷つてー

「・・・力は。」

「このはの石は・・・」

「貴水晶よ。」

「なにつ」

ミーナがその単語を口にした瞬間、団長が目の前に迫つていた。
威圧感に、あわあわと狼狽えてしまつ。

「みせう」

「ダメよー去えてるじゃない」

その言葉に巨躯が離れてゆき、凛はほつとした。
敵意を向けられているわけではないのだが、圧迫感が大きすぎる。

そのまま一人で何か話し込んでいたが、どうやら入隊を認めて貰えたようだ。

ミーナは上機嫌で、団長は不機嫌を隠さずともせざる凜のまつを向く。

「……ふん。まあ、力は関係ない。
遠慮なく指導をつけてせてもらひ。」

「あ、お願ひします!」

自分に向けて言われたらしく言葉にぴょいんと立ち上がり、お辞儀をする。

「……ついてこ。」

「ちよ、ちよっと待つてください。」

不機嫌をあらわにする団長におびえながらも、凜はミーナに向き直る。

「あの、本当に、ありがとうございました。
『迷惑をおかけしました』

ミーナはひらりと一一番お世話になつた。
離れるのに不安も残るが、遅かれ早かれ別れなければならなかつたのだ。

「いいのよ。あの人、不器用だけといい人だから。心配しないで」と、ミーナは可笑しそうに笑う。

早くしる。と団長が苛立つてくる。

いつてらりしゃい。ヒーナが笑む。

「はい！」

凛は、振り返らずに、部屋を後にした

5 (後書き)

団長 = モブキャラ (仮)

団長に連れられて着いた場所は、ドームのよつな、巨大な空間だった。

よくみれば、各部門の騎士たちが鍛錬しやすいよう薄い透明な膜のよつなもので三つに区切られていことがわかる。

団長が何か合図をしたのか、魔術師たちがざつと壁際による。

「俺のやるとおりこしほ。」

いうなり、団長は何かをぶつぶつとつぶやきだす。
すると、手の中に炎の塊が形成されていった。
手を振れば、炎は前方へと飛んでいく。

行き先を田で追つた凛は、遠くにある、小さな的にそれが当たるのに田を瞠つた。

的は100メートル以上は離れているのではないだろうが、周りで多くの術者が見ていて、これを成功させなければならぬのかと思ふと、気が滅入る。

「やってみる。」

どのみち通らなければいけない道のようだ。
(ならば早く終わらせてしまった方が楽だ)
凛は覚悟を決め、一步前へと踏み出した

団長は最初たかをくくっていた。

魔術には、確かに力の大きさはものを持つ。だが、それ以上にはつきりと「想う」ことと、それを助ける集中力が大切であった。

新人の最初の訓練は、このような衆人環視の場で行つのが定例であった。

多くの人の目とフレッシュナーにさらされながら、どれだけ実力を發揮できるか

殆どの新人はその重圧感に押しつぶされ、呪文の途中でどもつたり、集中できずに失敗する。

(この貴水晶だと坊ちゃんも同じだろ？)

そう、思つていた。

凛が、呪文も唱えず素早く、炎を的へと寸分たがわすけてるまで
は

凛は、成功したことに一息つく。

ミーナと練習したのは光を灯すだけだったので、
このように大がかりな魔術を使うのは初めてであった。

田は、僅かに驚きのためか見開かれていたが、

すぐにそれは何事もなかつたのよつて無表情になる。

「次だ。」

それから後も、凛は団長の後に続いて20ほど魔術を使ってみせた。

「・・・」で待つている。」

凛が自分の周りに張り巡らせていた防御膜を取り除くのと同時に、団長は足早にドームをでていく。

凛は呆気にとられるが、魔術を多く使い、少なからず疲れていたため、どこか休めるような場所はないかと周囲を見渡す。

視線を感じ、そちらに田をやると。

(う、わ・・・)

術師たちから好奇心まるだしの視線が向けられていた。

中には嫉妬や戸惑い、疑惑などのものも交じっているが、それも覆いつぶしている。

それも当然のことである。

魔術を使用する際には通常、精霊にはつきりと意志を伝え、かつイメージを明確にするため、詠唱を用いる。

無詠唱も、あることはある。

魔術師の中の一割ほどはでき、それほど珍しいものでもないと言える。

だが、無詠唱で想像と寸分違わぬ魔術を使い、さらにそれを何回も連續でできる人間となればそれは限られてくる。

更に、あれほど魔術を使っているにも関わらず、凛からの魔力の放出は異常なまでに少なかつた。

どれだけ制御が上手いとは言つても、最低でもその三倍は出る。

そんな規格外の新入りの術者に、

術師たちが知識欲を刺激されたのは致し方のないことだったのだ。

勿論そのようなことは知らない凛は思わず身じろぎ、この場から早く離れたいと切望した。

(だが、この人たちにもこれからお世話になる。)

視線はこわかつたが、親睦は深めておくに越したことはない、と思い直し、近づいてゆく。

「あのー・・・」

術者たちはお互いを見合い、意を決したかのように一人の若い術者が進み出た。

「一つ、聞いてもいいか?」

「ええ、構いませんよ」

好印象を『えてお』いつと、凛はふわりとほほ笑む。

それはさながら荒野に一輪の可憐な花が咲いたかのようだ、

思わず、術者たちはその笑顔に見惚れ、

（（（（（（こやいやいや、俺たちにそんな趣味はない…）））
）））

と全力で否定した。

前に出ていた青年は一番その破壊力の影響を受けたようで、
凛がしばりく呼びかけてやつと我に返った。

「わつわ、高等魔術を無詠唱でやつてたよな」

「うへとうまじゅつ・むえいしょ」

どちらもリーナからは聞いていない言葉であり、

「すみません、それについて詳しく説明してもらひても…？」

「あ、それはだな「その説明なら俺のほうが上手い」
「いや、高等魔術とこののはだな「違つぞお前…」

凛が知らないことと緊張を解いたのか、

話しかけたくてうずうずしていた術者たちは一斉に凛の周りに集ま
つてくる。

集まる術師の中で最初は上手く立ち回っていたが、
疲労は蓄積されてゆき、躊躇いて転んでしまう。

その弾みにペンドントが服から転がり落ち、それをみた術者が瞠目
する。

「あ、あすこしょつ・・・」

「おこ、お前がうつした。つて・・・ 貴水晶ー?ー?」

「「「「「えー?」「」「」「」「」「」「」「」「」「」」」

それを耳にした術者たちが一斉に凛の周りから遠のく。

「こ、これがどうかしたんですか」

凛は困惑し、ペンドントを透かし見た。

先ほどまでの熱気を一気に冷ますほどの効果がこの石にはあるのか。

凛は小首をかしげる。

・・・と、

「おこ、行くぞ」

「「「「団長ー」「」「」「」「」「」「」「」「」」」

団長は凛を立たせて、腕を掴み、出口へと引きずりしていく。

凛は慌てて術者たちに一礼し、風のように一人は鍛錬場から去つて行つた。

「なんなんだ、あの坊主・・・」

一人の呟きに、全員が賛同する。

「団長が初期訓練の準備をしりつーから何事かと思えば・・・」

「しかも団長直々に規範となり・・・」

「高等魔術を無詠唱でやって見せ・・・」

「終いには石が貴水晶だつて・・・?」

「「「「はあ・・・・」「」」

いきなりあらわれた規格外な美しい少年の正体について、術者たちは何日も悩まされることになつたといつ。

団長に引かれるよつとして連れてこられたのは、団長の執務室のようだ。

机の上には乱雑に書類が積み重なり、とじれた段り書きのよなメモが見える。

掃除は行き届いているが、これでは仕事もしきついだらう。

「騎士の登録をする。」

団長が机の上と引き出しの中を漁り、一枚の紙を取り出した。引を引しの中もなんだかひやひやしている。

「書け。」

ペンと共に出される。

幸い、ミーナがかけていた魔術は話し言葉だけでなく、文字にも効果があったようだ。

みたこともない文字の意味がすらすらと頭に入つてくれる。近くにあつた椅子を台にして書きだす。

馴れていらない万年筆のためインクがどこかびりびり滲んでいるが、それくらいは許されるはずだ。

項目は、「名前」「年齢」など一〇ほどであった。

途中に「性別：男性」と書いてあるのをみつけ、僅かに動搖する。

覚悟はしていたのだ。

周りからは、男として見られる事になるのさ。

ただ、そう思っていたのと、この文書にして、文字にして田の前に出されるのは、あまりにも違いすぎた。

動搖を内面に押し隠し、項目を埋めていく。

最後の項目で筆が止まる。

翻訳魔法のおかげで言葉は伝わってくるが、意味がよく理解できない。

「精靈獸」とはなんなのか。

「あの、これって……」

「まだ居ないのか？」

紙を覗き込み、どこで止まっているのか確認した団長の 無表情の中に驚きの色がみえる。

その反応を見る限り、魔術者には居て当然のようだ。

「は、はー・・・」

団長の話をまとめれば、

精靈獸は、精靈が獸の形に変化したものである。

通常は幼少時に魔力があるとわかつた時点で、知り合いの術師か、魔術学校（小学校のようなものらしい）の先生の監督のもと、召喚陣を行い、契約を行う。

また、術師の力の大きさによって精靈の強さが決定される。

術師の力の大きさは一般的には生涯変わることはないため、契約した精靈獣は、生涯術者に付き添つ。

とのこと。

「まだ、契約していなかつたのか。」

ふむ。

と、団長は暫く考え込むと、

「ついでだ、この機会に行つてしまおつ」

「えー？」

凛は驚く。

先ほど、「生涯付き添う」と言つてはいなかつたが、そんなに簡単に、気軽に行つてしまつてよいものなのであらうか。

悩む凛を尻目に、団長は黙々と召喚陣を床に描いてゆく。

「中に入れ。」

「は、はい！」

威厳に満ちた声に反射的に従つた。

「繰り返せ。レッタ・フォル」
召喚

「れつた、ふおる？」

その瞬間、田の前が暗くなる。

眩暈がして、思わずその場に座り込んだ。

(なんなんだよ、これ……)

眩暈がおそれあり、ゆっくりと田を開ければ、そこには、白い空間が広がっていた。

とりあえず、状況確認もしなければならない。

そんな思いで立ち上がり、周りをきょときょと見渡す。

周囲には何もなく、延々と白が広がるだけだ。

前に進んでみても、景色は変わることはない。

「……誰か、でてこよ……」

思わずため息とともに「そんな言葉が零れた。

「汝、我を呼ぶか?」

「え?」

周りを見渡しても、空間に変化はない。

「汝、我を呼ぶか?」

再び、声が聞こえる。

重厚で、腹の底に響くよつた声。

「あの、あなたは・・・？」

「我、精靈なり。汝、我的力を欲するか？」

一瞬戸惑う。

しかし、これが団長の言つていた

「契約」かもしないことに気が付き、声に応える。

「はい。私に、力を貸してくれますか？」

契約の方法など知らなかつた。

ただただ、この響いてくる声に
この身を預けたいと心が欲していた。

「承知。名を授けよ。」

「メイシェス。」

無意識のうちに、その名が口から零れた。

「貴方の名前は、メイシェス。」

「承知。我、此処に汝と約束を結ぶ。」

かあつと胸元が熱くなる。

前を見れば、大きな黒豹がこちらをむいて座っていた。
不思議と恐怖は感じなかつた。
近づいて、鼻面に触れる。

瞬間、
視界が暗転した。

7 (後書き)

アドバイスいただきました
有難や、有難や。

8 (前書き)

前回の続きをです

再び目を開けた時には、
もと居た執務室の床にへたり込んでいた。

団長が眉根をよせてこちらを向いている。

失敗したのか

不安に襲われ、体の力が抜けてゆく。
しかし、隣の黒豹が頭をつつき、団長の終わったぞといふ言葉で
召喚が成功したことを悟る。

「良かつた・・・」

子供でも成功するような召喚に失敗するなら、
もしかしたら騎士団への受け入れを取り消されるかもしれない
と危惧していたのだ。

「大丈夫か、リン」

あの重厚な声がきこえる。

思わず豹の目を覗き込めば、金色の瞳が光る。

「君がしゃべつてるの・・・?」

「他に誰がある」

ふんと偉そうに鼻を鳴らす姿に頬が緩んだ。

「お主と我はは喋らずとも、離れていても意思疎通はできる」
「もつとも、それ以外の奴は言葉は通じんがな」
とメイシエスが言つ。

(ねえ、めい「真名で呼ぶな」・・・え?)

〔真名で呼んではならぬ〕

理由は分からなかつたが、
メイシエスがそつ言うのならそのようなものなのだろう
と、解釈する。

(うーん・・・じゃあ、シエスで。)

頭の中でそう答えれば、気に入ったのか
尻尾がぶんぶんと揺れるのがみてて、
思わず首に飛びつく。

「か、かわいい!」

凜は動物好きだ。それもバカがつくほどに。

元の世界でもそこらにいる猫だの犬だのに懐かれては
頬をほころばせる姿が目撃されていた。

しかし、「凜様、ギャップも素敵だわ・・・」と

女子たちに密かに観察されていたことは、
凜は知らない。

「う、うむ。・・・わざからその男が此方を見つかる。
居心地が悪うてならぬ」

(あ、団長のこと忘れてた)

立ち上がり、少し恥ずかしく思いながら団長に向き直る。
若干顔色が悪い気がするが、しつかりと立つて居るのを見る限り、
大丈夫なのだろう。

「・・・大きいな。」

横を見ると、確かにシェスは、大きい。
凛が立ち上がつても頭は凛の腰程度である。

「それでは田立つ。小さくなるよう命じる。」

「命じる」という言葉に違和感を感じながらも、
シェスに語りかかる。

(シェス、もう少し小さくなることはできない?)

「何故だ。田立てば我がリンを守つて居ることを周囲に知らしめる
ことができる。」

シェスは不満げだ。

確かに、体を小さくするのは窮屈そうではある。

しかし、

(お願ひつ。人間もいろいろと大変なんだよ、きっと。
今後の平穏のためにも、ここは譲れない。)

「お主はまるで自分が人間でないかのような話し方をするな」

シェスは苦笑し、体をみると小さくせつねへ。

変化が終わったとき、そこにいたのはふわふわの毛に包まれた子豹だった。

リンのほうを見上げ、ことこと首をかしげる。

「どうじゃ？」

（かわいすぎるよつ）

抱き込んで撫でたい衝動を抑える。

「それで構わん。」

団長が紙の最後の欄にそりそりと書きこんでやべ。最後に判子を捺すと、紙は一つの銀の輪に変化した。

よく見ると、

一つはシェスの瞳のような金色の、もう一つは凜の瞳と同じ漆黒の口が一つづつ飾られている。

「金のまつを凜、黒のまつを亞麻獣につけらる」

輪はすると腕に通った。

シェスのまつは首輪にするのかな、と見て、

「これ、通りますか？」

輪は凜の拳が入る程度で、シェスの頭が入るとは到底思えない。

「頭にのせてみる」

訝しく思いつつも載せる。
すると、輪は広がり・・・根元の位置でちよつと良し大きさになつて縮んだ。

「それには魔術がかかっている。
大きくなつても邪魔になることはない」
「なお、それは身分証明書の役割も果たす。
気をつける。」

「ほう、と感嘆しつつも、

「こじが異世界だといふことを再認識せらるる。

「とりあえず、今日はもう休め。
案内を呼ぶ。」

手を叩くと、執事のような人がやつてくる。

「お呼びでしょうか」

「こいつをあじてる部屋に案内してくれ

執事さんは一度は驚いたように見えたが、
「承りました」と一礼する。

「アーティスト」

「はーー! あ、お世話をになりました」

凛も団長に礼をする。

せつせと行け

という言葉に見送られ、部屋を出る。

途端、腹の虫が存在感を主張する。

よく考えれば昨日の昼から何も食べていないのだ。

恥ずかしさで顔が赤くなるが、

新事じんはナヌチなどでもいふかのよに肩をたたかれる

部屋にはすぐについた。

「執事さんかサンドイッチのような軽食を持ってきてくれる。『御用がありましたら』このベルをならしてください」と言って、部屋から出て行つた。

「はあー···」

軽食を食べ終わり、

ベッドに寝転んで長い溜息をつく。

「どうした

シェスが尋ねてくる。

「なんか、いろいろあつたなあと思つて。」

「氣づいたら森に居て、剣を向けられて、
守り人に会つて、魔法を使って・・・」

思わず、涙が一筋零れた。

「だ、だめだね、こんな弱氣でこわや」

「じじじ」と頬をこすりとすると、
シェスがベッドに飛び乗り、それをとめた。

「我の前では弱氣でもよ。存分に泣け。」

「シェス・・・」

その夜、凛はシェスを抱いて、
泣きはらした目を静かに閉じた。

9 (前書き)

ちょっと今回は説明チックな部分が多いです。
設定を作りこむのが、自分苦手なことに今更気づきました・・・

窓から差し込む光で目が覚めた。

凛はベッドから下りて伸びをする。

付き添いのようにショスも下りて同じように伸びをするのを視界の端でとらえる。

明るくなつてから部屋をよく見渡せば、そこは某高級ホテルのスイートルームとでも見紛うような高級感溢れる空間であった。

今踏みしめているカーペットはフカフカで、足の下に敷いていることが思わず申し訳なくなる。

家具には纖細なレリーフが掘り込まれ、丁寧な手作業を施している様子を思い浮かべることができた。半ば興奮気味に部屋の装飾や家具を見て回つてみると、じんこんとノックの音が聞こえる。

「はー」

「おはようござります。お目覚めはいかがですか?」

入ってきたのは、昨日もお世話になつた執事さんである。よく見れば、この初老の執事さんも「ロマンスグレー」と云つた感じで、

若いうちにまだかしモテたのではないか、と凛は想像する。

「とても良かつたです！ありがとうございました」

凛はほほ笑んでお辞儀をした。

もと居た世界でも受けられないような待遇である。
不満など、あるはずはない。

「それはよついでござりました。」

嬉しそうな凛を田にし、執事も類を綻ばせる。

(「この部屋は客間の中でもあまり良いものではないが、
密に喜んでいただけたならそのよつなことは関係がない。」)

ヒ、当初の田的を思い出し、凛に問いかける。

「といふで、湯あみと食事とどちらを先になさりますか？」

「お風呂と、ご飯ですか？」

「やうですね、ではお風呂を先に・・・」

「承知いたしました。ではメイドを呼びましょう」

「ま、待ってください！大丈夫です一人で入れます呼ばなくて構いません！」

凛は慌てた。

この服の下にはさりしをまいていり、
裸で風呂に入れれば性別を偽つていいことなど
すぐにはれてしまつだらう。

「？？？承知いたしました。

それでは、着替えを用意しておきます。」

息を荒くしながら一人で入ると息巻く客人に疑問を抱きながら執事は部屋をでた。

「あ、危ない」

思わずベッドに身を投げ出した。

「何がだ？」

先ほどまでの浮かれた様子とは違つ凜の様子にシェスが寄つてくる。

「……………シェスは私が女だつてこと〔知つてある〕
・・・え。」

凜はぱつと身をおこす。

そ、そんなに隠せてなかつたが、もう知られているかもしれない
と不安そうに瞳を揺らす凜に、

「我ら精霊にはその者の本質が見えるゆえ。

心配はいらぬ。そのように人間はリンを見ぬ。」

シェスとしては安心させようとして言つてくれたのである。しかし、男装が成功しているという安心感は得られたが、残り僅かな凜の女としての矜持が傷ついたのは言つまでもない。

「そ、そう……ありがとう……」

僅かに気落ちしているらしい凜の様子をシェスは不思議に思う。

「？？ とりあえず、湯あみに行かねばならぬのではないか？
早う行かねば意味がない」

「そうだった！」

凜は慌てて先ほど見つけていた風呂場へと飛び込む。
幸い、シャワーや石鹼などの使い方に差異はないようだ。

体を流す水が見る間に濁つてゆくのを見て
自分が今までどれ程汚れていたのか自覚した。

もともと奇麗好きな性質である。

既に湯船につかっていたシェスに心配されるほど肌をこすり、
気の行くまで頭を洗い、

「ふうー・・・

異世界に來ても、やはり日本人である。
お風呂や、温泉という類には弱いのだ。

乳白色の湯を眺めながら、ふと思いついた疑問を口にする。

「シェスってまさか女の子だよな？」

「何をいつておる。我はれつきとした男ぞ
信じぬのならこゝで人型になつても」

「でてけ――――――――――――

* * * * *

一人と一匹は早々と風呂を出でいた。

シェスの性別詐称疑惑（？）が露見し、
凛がシェスを風呂場から追い出してしまい、
このような状況では落ち着かないとい、
後を追うように凛もあがつてしまつたためである。

そういえば、さつき耳慣れぬ言葉を聞いた気が

「シェス、さつき人型つて言つた？」

「言つたぞ。我は高貴な精靈故。」

「高貴・・・？」

首をかしげる凛にこれしきのことも知らぬのか、と
シェスは説明する。

「精靈にもいろいろとある。

その中でも大きく二つにわかれておる。

一番位の低いもの 低級精靈 は、厄介だな。

力はそれなりにあるのだが、気の赴くままに動くために
しばしば術師によつて精靈界に強制的に戻されることもある。

次 中級精靈 はまだよいほうか？

精靈獸になると、精靈の時に持つておった力が半減するのよ。 。

ただ、術師の「ひ」とは聞くな。

最後が高級精靈よ。

我の様に自我もある。力も変わらぬし、
稀に増えることもあるらしい。

だが、もう一つ上にあつてな・・・」

もつたいたいぶつたよつたショスに凛は我慢できず
続きをせつづいた。

「その、一つ上が？」

「我らのような精靈よ。

契約も他のものは喚ばれたならするほかないが、
気に入つたものとだけするのよ。
力も高級のなぞよりもあつてな、10倍はくだらんだひう。
我らのみ、精靈獸になつても人型をとることができる。
ただし、これはよつほど氣に入つたものにしかみせぬ。」

どうだと言わんばかりの説明に、凛は素直に感心した。

「へえー、シエスはすごいんだな」

力も人型特典とか面白いと凛はしきりに感心している。

お前のことときに入つておると意外に含めた説明に全く気付かない
凛に、

ショスは密かにため息をついた。

その時、じんじんと本日一度田のノックが聞こえる。

れきほどの執事さんが来たのかと、
凛は返事をし、扉を開けた

9 (後書き)

此処まで読んでくれてありがとうございます！

10 (前書き)

少し更新遅くなりました
ついに10話まで来ました！
みなさんありがとうございます！

入ってきたのは、執事さんではなく

「お邪魔しまーす」

「・・・」

「あの時の・・・?」

「覚えててくれたんだー」

森で出会った一人だった。

あの時は、確か意識を失つて倒れてしまつた。

ということは、恐らくこの二人が此処まで運んでくれたのだろう。

「先日はお世話になりました。」

二人を椅子に案内し、凛は礼を言つ。

もし、違つたのだとしてもこの二人に迷惑をかけたのは間違いない
だろう。

「全然いいよー」

と、長髪の人はひらひらと手を振る。

それを不機嫌そうにみやり、口を開いたのは短髪の人だ。

「俺たちが此処に来たのは、魔術師団長から
お前をパーティーの術師に推薦されたからだ」

「え・・・」

凛は戸惑つ。

パートナーのことも、仕組みのことも聞いていた。
しかし、自分で言つのは悲しいが、
こんな どの馬の骨ともわからぬようなものを実践に出してよいの
だらうか。

「でも、自分はまだ初心者で 」

「大丈夫大丈夫

俺ら結構強いほうでさー、

一人くらいのカバーならどうにかなると思つんだよね

「と、いうことで自己紹介

俺が「」のケイト・ファンナール・ド・ラメリア。
ケイトって呼んでよ。

で、こっちの仮面してんのが 」

「・・・ルミル・ラ・フォール・レイチャエル

「で、「剣」。かなり強いんだよー

レイつて呼んであげて。

で、名前をきいても?」

「あ、はい。篠原凛です」

「リン君か。珍しい響きだね。

で、これが証明書なんだけど 」

凛が勢いに押され、困惑する間にもじとはじとじと進んでゆく。

口を挿んでも、長髪の人 基、ケイト は聞いてくれないだらう。
しうがなく、二人を観察しだす。

まず。一人とも俗に言われる「美形」という部類に入る。

ケイトのほうはなんだか貴族という感じだ。

細身ではあるが、騎士であるからには
きつと体も鍛えてはあるのだろう。

肌も抜けるように白く、白銀の髪もさらさらで、
女性が羨むことは間違いない。

田は常に細められていて、人当たりの良い笑みを浮かべている。

だが、柔らかではあるが隙のない物腰、
少し不自然な 軽薄なしゃべり方が
この人間の本性はほかにあることを示している。

一方、レイのほうはまさに騎士という感じだ。

肌は浅黒く焼けて、灰海色の瞳は怜俐な光を発している。

体も筋肉がついて引き締まつており、
「剣」だというのも納得できる。

(「こののは「ワイルド」と言つんだらつか)

と見ていると、視線を感じたのかレイが顔を上げる。

田があつて居心地が悪くなるが、直ぐにそりされた。

内心では少しむつとした。

初対面 でもないが、微笑む位のことはして貰てもよいのではないか。

しかし、先ほどのケイトの紹介の仕方を見る限り、これが彼なりの対人法なのかもしれない。と自分を納得させる。

「 とこつーことで、これから宜しくー。」

説明が終わつたらしく。

手を差し出され、一瞬何をするのかわからなかつたが直ぐに握手を求められているのだと理解する。

「 よ、宜しくお願ひします。」

「 じゃ、俺らの部屋に案内するよ」

「 え？ 相部屋なんですか？」

当然別々だと思っていた凛は聞き返してしまつ。

「 パーティーは一つの部屋に寝るんだよー 僕たちと一緒の部屋はいやかい、少年」

一気に悲しそうになるケイト。

「 そんなことはないですー。」

こんなことでこれから長く付き合つては困る。
不仲になつてしまつては困る。

そんな思いがこもつたからか少し呟ぶ呟くなつてしまつた。

「あははは。希望してくれてうれしいよ。
リン君の荷物は？」

「あ、あのカバンです」

指さす一つの小さな旅行鞄をみたケイトが
驚いたように目を見開く。

それも当たり前だろ？

貴族の子であれば、時には馬車一台分も持つて居ることもあるし、
平民の子でも最低大きな旅行鞄二つくらいはあるものだ。

凛の荷物はあまりにも少なすぎた。

凛としては、革でできたこのバッグの中身は多くくらいだった。

「貴殿の着ていた服は、ミーナに預ける

」この鞄は活用していただきたい

とこうメモと共に机のそばに置かれていたこのバッグには
服、革製の手袋から、

ありとあらゆる必要と思われるものが詰まっていた。

こんなによくしてもうつていいのだろうか、と凛は逡巡している。

この待遇が、将来有望な、

身寄りのない魔術師のためであるといつ」とは、
もちろん凛は知らない。

「行いくではないか、リン」

シェスが突然ひざの上に飛び乗ってきた。
困惑する凛をみかねてきてくれたのだろうか。

(シェス！・・・でも、大丈夫か？
）こんなのが戦えるだらうか・・・)

自分の戦いとは無縁だった貧弱な体躯を見、
凛はシェスに問う。

「我がある。危険な時は助けてやるゆえ。」

自信満々でこいつをみつめるシェスに心が凧いだ。

確かに理由なかつたけれど、シェスは自分のことを裏切らない。
そんな気がした。

「・・・はい。行きましょう。」

シェスと話し合ひのを待つてくれていたのか、
ケイトが此方をにこにこと見つめていた。

「うん。行こうか。」

立ち上がり、短い間ではあつたがお世話をなつた部屋を出る。

鞄を持ち、シェスをつれてそのまま歩き出やうとする
レイが怒ったように喋ってきた。

「精霊獣は「じばつて」おかなくていいのか」

「『縛る』…………何故ですか？」

「何故かだと、暴走して被害を『与えたらどうする』

つつかかるレイをケイトが宥める。

「その精靈獸は「黄金」色だから心配な『』
さつき話していたの見なかつたの？』

「ちつ・・・」

ケイトに言われ、レイは不機嫌そうに速足で先に行ってしまった。

「何がまことに』とでも言いましたか・・・？』

「あいづはいつともあんな感じだからさ。
気にしなくつていこよ』

早くも暗雲が立ち込めた騎士生活に、
凛は不安を覚えながらも廊下を歩き続けた。

11(前書き)

ケイト君視点です

この前の話でやつと副主人公が出せて良かつた・・・

お、お気に入り登録の数がすばらしいことになつております！
みなさん有難う御座います・・・（泣

魔術師団長からパーティーの術師がみつかつたという知らせを受けた時には、何かの冗談かと思った。

この時期には新入りは既にパーティーはきまつてゐるはずだし、僕たちのレベルに会うような術師がこんな時期外れに入つてくるのはタイミングが良すぎやしない。

でも、団長が言ひのだから間違いはないのだろう。

術師がいると言われた部屋は客間だった。
客間の中では一番質素な部屋はあるが、騎士候補が通される部屋ではない。

誰か有力者の斡旋があつたのだろうか。

扉を開けて出てきたのは、
まだ年端もいかぬ小柄な少年だった。

自分で開けたくせに驚いている。
だれかほかの人間を待つていたのだろうか。

そういえば、この顔どこかで
と感じたところで思い出した。

この前、管理区域にいた子だ。

レイが怒つて宥めたり、
後処理や書類が面倒だつたからよく覚えている。

向こうもこいつを思い出したようで、ソファに座つて此方を見ると礼を述べてくれる。

素直に謝るところを見る限り、傲慢な人間ではないのだろう。

軽く自己紹介をした後に話を進める。

レイがずっと不機嫌だから、早く進めておかないと話をなかつたことにされかねない。

冗談じゃない。

僕らのパーティーに見合つ新人がどれほど希少なことか。それがレイの機嫌のせいで失われたら田も当たられない。

口ではペラペラとしゃべつながらも、

少年 リンと言つていた をさりげなく観察する。

まず田に入ったのはこの国では珍しい黒髪と黒目だ。顔や雰囲気も、どこか神秘的で、

ここにいるよりも神殿で神官をやつているとも言われたほつがよっぽど納得できる。

しかし、本当に、これが騎士だろうか。

薄いシャツとズボンの上からもわかる細い手足に鍛えたような様子は見当たらない。

いくら少年と言つても、身長も低いのではないか。

しかし、先ほどから気になつてゐるのは少年から感じる女性らしさだ。

先ほどまで風呂にでも入つてていたのか動くたびに花のような香りが熱と共に立ち上り、短い髪から見え隠れする白い項は妙な色氣がある。戸惑つてゐるのか瞳を揺らして所在なさげに座る姿は庇護欲をそそつた。

血色の好い薄い深紅の唇と、濡れ羽色の髪に触れたいと思うのは、相手が女性でもない限り、僕が思わないことだ。

細い手足も発達途上なのではなく、女性と考えれば納得がゆく。

だが、騎士になる以上そのようなことはありえないだらつ。団長のお墨付きでもあるし、心配はない。

ただ、癖は抜けないのか、女性に向けるような優しさを少年に見せたことは『愛嬌』といつものだ。

握手をして驚いた。

手にはあかぎれもまめもなく、指は細く、強く握れば折れてしまいそうだ。

苦労した様子が全くと言つてよいほど見受けられないので、

もしかしたらお坊ちゃんなのではないかと心配になる。

だが、それでもいいと思え、

ここに来るまでは僅かながらあつた力量に対する不安がぬぐわれたのは、

精靈獸の瞳が黄金であることに気づいた時だ。

瞳が黄金であることは、

召喚した人物が相当な力を持つていることを意味する。

また、そのような精靈と契約できたということは
心根も奇麗であるということで、

力の大きさだけでなく、ちゃんと精靈術も使えるのだらう。

また、黄金の精靈獸はほかのものと同じように、
暴走の心配をしたり、「縛つて」おく必要もない
で心配の種はまた一つ減る。

説明と書類への記入を終え、

部屋に移るため、リンに荷物のことを聞く。

指された鞄を見て驚く。

最初の坊ちゃんという認識は改めよう。

坊ちゃんがこんなに身軽であるはずがない。
しかし、いくらなんでも少なすぎるのではないか。
僕が入ってきたときだって、もつ少しはあつたはずだ。

そういえば、この部屋を使っている時点で

違和感がある。

精靈獸とも、他で見かけるような主従関係といった風ではなくむしり友人・・・?

そんなことを考えた自分に苦笑する。

いぐり契約が許された身であつても、よつぽどのことがなれば精靈が親しくするなど考えられない。

精靈は人間を卑小な存在と考えて居るようでは世の中の大半の人間には相手にしない。

魔術師も例外ではなく、精靈獸の暴走がおこるのもそのためだ。確かに誰だつて精根の腐つている様な奴には従いたくないものだ。

精靈獸の場合、反抗が顕著な形で現れるため、暴走としてとらえられるのだ。

だが、それも違和感を感じさせてくる一つの要因である」とには違いない。

「これで貴水晶だつたら、もう何も言わないわ
そつ思いながら、客間を後にした。

12 (前書き)

これからは更新ひとつになる予定です
宜しくお願いします・・・汗

着いたのはイメージ通りの部屋だった。
質素で、必要最低限のものしか置いていない部屋。

広さはそれなりにあり、風呂場なども設置してあるみたいだ。

荷物を居間らしき場所に置き、
ソファに座り込む。

いくら同じ施設内とはいえ、
棟も違ったため、相当な距離を鞄を持って歩いたのだ。
疲れても無理はない。

レイは用があると出かけてゆき、
今はケイトと部屋に一人である。

「リン君ってどう生まれなの？」
「家族は？」
「騎士団に入らうと思つたきっかけは？」

話題としては一般的な世間話ではあるが、
この世界の常識をまだ知らない凛にとつては
ひやひやするものばかりである。

「あ、あのー・・・
その、凛君って呼び方やめていただけませんか？」

朝から、LJの呼ばれ方は「そばゆ」と

感じていたのだ。

「じゃあリンも敬語やめよ！」

「む、無理だと思います・・・」

凛は口が悪い。

と言つが、人に誤解を招いてしまうのだ。

不愛想に訥々と紡がれる言葉は気持ちの良いものではないだらう。

その点、敬語ならば不自由なく使いじうことができたし、意志を正確に伝えることができた。

「わう。それは残念。」

とケイトが全く思つていなこよつな口ぶりでのたまつ。

「確かに琳は平民の出なんだっけ

「はい・・・」

確か、話の流れでそのような設定になつていていたはずである。

孤児だったの両親も生まれもわからない。

お使いに行つて絡まれ、騎士に助けられて志した。

そして、性別は、男

少しの真実とうそを織り込みながら話を紡ぐ。

絵本の中のような話ではあるが、一番不自然がない。

嘘をつくことに罪悪感が芽生えたが、

生きてゆくためだ、致し方ない。

「じゃ勉強もしなきやだね、
本持つてくるからちょっと待つてよ」

そういうとすぐに部屋を出していく。

はあ・・と凛はソファに身を預けた。
ケイトとはなんとかなかよくやっていけそうだ。
でも、なんだかレイは自分のことが嫌いなようだ。
そんなことをつらつらとかんがえていると、
シェスが膝に飛び乗ってくる。

そういうえばいい天気だ。

こんな日は外を歩いたらきっと気持ちがいいに違いない

手はシェスの滑らかな毛並みを撫でながら、
温かな陽に誘われて凛はうとうとと眠りに落ちて行った
凛は幼くて、母の膝の上で物語を読んでもらっていた。
二人ともとても幸せそうな表情を浮かべている

ああ、これは夢か

母は凛の髪をすきながら語りだす
むかしむかし、勇敢な一人の騎士と、
それはそれは美しいお姫様がいました

物語は終わり、母はさらさらと砂になつて消えてゆく。
幼い凛は泣くのを必死にこらえて母を探し求める。

途中で優しい手が頬を撫でて行った気がする

そこに母のぬくもりを見つけたような気がして、思わずすり寄った。

目を開けると、ケイトがこちらを覗き込んでいた。

「起きた？」

「すみません」

自分のために時間を割いてくれているのに当の本人が眠りこけているなんて。

「今さつき帰ってきたんだけどね。
気持ちよさそーに寝てたから、
起こすのは忍びなかつたんだ」

「あと、リンに勉強を教えてくれるジョナスさん」

「ジョナスと申します」

さつき帰ってきたといった。

それではあの頬を撫でて行つた手は誰のものだつたのだろう。疑問を残しながらもジョナスへ礼を返す。

ジョナスさんはもともとレイ着きの使用人だつたらしく、流れでこのパーティーの世話係となつたのだとか。

いつもは身の回りの細々とした世話をしているらしいが、
今回は凛の勉強のお手付け役として適任といつて抜擢されたらしい。

「誠心誠意、この役目務めさせていただきます」

その瞬間、ジョナスさんの口の端が
いやつと呻つ上つたのは見ていないことにしておつ・・・

* * * * *

それから丸々三日間、凛は地獄の中にいた。

思った通りジョナスさんは相当な「鬼畜」で、
騎士の嗜みと称して
この世界のでき方から経済学、政治、果ては法律まで
きつちりと覚えさせられ、
凛は疲れ切っていた。

こんなに勉強をしたことではない。
学校でもなんとなく受けていた授業もこんなに濃厚な内容だった
のだろうか。
しかし、爽快感を感じるのも事実だ。
やりきったという思いが体を満たしている。

「お疲れ様でした」とました

ジョナスがお茶を持ってくれた。

「有難う御座います」

ジョナスと一緒にお茶を飲む。

最初はジョナスは同席ということに抵抗を示していたが、一人で飲んでも楽しくないと凛が頼み込んだのだ。

「これで、ひとまず机に向かつての勉強は終わりです。私の役目も一段落ですね」

「お世話になりました・・・

でもこれからも話せますよね?」

ええ、とジョナスが答え、穏やかに時間が過ぎていく。

「机に向かつての、つて言いましたよね
じゃあこれからは何をするんですか?」

「ええ、乗馬や剣術、体術、それから」

「ちょ、ちょっと待つてください

お」「僕つて魔術師ですよね」

「俺」と言つて慌てて言い直す。

ちなみにこの言葉づかいを直すのもジョナスの講義の一環だった。

「魔術師だからと言つて襲われたとき

咄嗟に対応できなかつたらどうします

「明日からはレイさんとケイトさんが先生ですよ」

「・・・わかりました・・・」

おそれらく明日からもまた続く地獄に凜は小さくため息をついた。

12 (後書き)

10 / 02 前書きに誤字(?)

13 (前書き)

これから馬術とか剣術とか体術とか・・・
が出てきますが、筆者は全くのど素人です

描写で違うところがあつても、
生暖かい田で見過ごしてやつてください
その道の方、申し訳ありません・・・

今日から教わるものが運動系のものになる。
「心配だ」としかいよいよがない。

元の世界でもそれなりにしか運動はできないまつではなかつた。
全くできないうわけではない。
ただ、何かのスポーツをやつていていたわけでもなく、
鍛えるでもなくできたこの体は、
騎士としての役目を果たすことができるだらうか

本分は魔術になるだらうが、

昨日も言われた通り、できたことに越したことはない。

不安ばかりが募る。

「心配するでない」

とショスが頬を舐める。

不安を感じて来てくれたようだ。

(でも、不安にもなるだらうへ。)

「問題ない。

お土は芯はできてもおむ。そして肉づけをしていくだけのこと」

もう一度ショスが頬をなめる。

そこから何か温かなものが伝わってきた。

覇氣のない凜を心配する気持ち、自分が勇気がつけられないもどかしさ……

そこ今までいってこれはシェスの思いだと理解する。

(・・・ありがとう)

シェスに頬ずりをしてたちあがる。

こんな小さなことで憂う暇はなかつた。

寝間着からすでに用意されていた服に着替える。

二人は既に朝の鍛錬に向かつたようだ。

さらしを巻き直すために姿見の前に立つ。

(何だこれ・・・)

右の鎖骨の部分にタトゥーのように何か掘り込まれていて、体を近づけてよく模様を見れば、

何かわからない言葉とバラがデザインされた紋様のようなものだった。

紋様の色は少し青みがかつたような黒。

「どうしたリンク」

シェスが足元で座る。

「我的紋様か。うむ。奇麗に入つておる」

(え?これつて・・・)

〔我が共にゐるところの証よ〕

どうやら契約印のようなものらしい。
しかし・・・

(これ、入れなおせないのか・・・?)

紋様の入っている位置は、
下の部分が少しさらしで隠れるほどだ。
みえるならみえるなりの、
見えないならみえないなりの着こなしこのものがあるが、

中途半端だ・・・

しかし、それを言えばおそらくシエスは少なからず傷つぐだらう。
先ほども心配をかけたのだし、この程度のことなら胸にしまつべき
だ。

着替え終わるとほぼ同時に
ジヨナスが部屋へと入ってくる。

「そろそろ鍛錬場へ向かいましょう
案内いたします」

「お願いします」

* * * * *

鍛錬場ではすでに多くの騎士たちが訓練に励んでいた。

恐らく一人もこの中にいるのだろうと見当をつけた。

・・・が、如何せん騎士の数が多すぎる。

そこできょときょと探していたが、不意に背後からきた衝撃で膝をついた。

「…？」

「悪いな、あんまりにも貧相だったものでみえなかつた」

振り返ると5人くらいの騎士が凛を見下ろして笑っている。先ほどのセリフは真ん中の気取った騎士が言つたものだらう。

「さすが下男だな、その服よく似合つてゐるぞ」

「こんなやつにはこんな服しか合わないんですよ」

不快な笑い声をあげながら、凛を貶める言葉を吐き続ける。騎士たちの会話から得られたのは、階級のよつなものが服で示されるということ。

傲慢そうなしげさや、言葉づかいを見る限り、この人たちは貴族なのだろう。

さしづめ、みたことのない下つ端の新人をみつけ、いびりにはいったといふことだらうか。

「こんなやつが何故騎士団に入れたんだらうな」「きつと見る目が節穴なんですよ」

それまで無意味な嘲笑を受け流していた凛だが、

その言葉を聞いて怒りがこみ上げる。

自分のことを言つならまだしも、ミーナや、団長のことと懸く言つのは許せない。

「取り消してください・・・」

「む？」

「取り消してください！」

ほかの人のことまで悪く言つるのは違つと思こます」

立ち上がり、凛は叫んだ。

基本凛は懐が広い。

めったに怒ることもしなかつたため、自分でも声をあげた自分に驚いていた。

「何だと！」

「アスター様にたてつくなど！」

取り巻きの一人が拳を握り、

そのまま凛の顔へと向かってくる。

殴られる・・・！

・・・と、

「フーーーン」

皿をつぶすらと開ければ、

笑顔で手をぶんぶんと振りながら走るケイト。

騎士たちはそれをみるなり顔を青くし、
脱兎の「」とく立ち去つた。

「お待たせー僕らの鍛錬はあっちでやるよー

「はい・・・あの、ありがとうございました」

「何がー？」

前を向きながらにこにこと笑うケイト。

わかつていて、わからないふりをしているのだらう。

多分、あのままいけば凜は立ち上がる」ともできないほどに
痛めつけられていた。

途中で通り過ぎていく人も、興味がないといったかのようす
助けるでもなく過ぎ去つていった。

「・・・いえ。何でも。」

「なら良いけどー」

連れてこられた場所にはケイト以外誰も居なかつた。
土が敷き詰められ、鍛錬場として設備を整えられていた
先ほどの場と趣向が違つようだ。

森を切り開いてそのまま場としたかのよつなそこのは
多くの精靈たちの気配らしきものが感じられた。

恐らくは好奇心に惹かれてやってきたのだろう。

「それで、何をするんですか？」

「まずは体術だよねー」

体術を会得し、基礎を整えたうえで剣術などの他の物へとつるらっこい。

「今日は僕が講師だよーよろしくー」

「よろしくお願ひします」

* * * * *

ここにこと笑うケイトにほつとしたのは事実だ。
しかし、そのケイトの本性を見誤っていた・・・！

「リン、軸がぶれたよーあと20分追加ねー」

微笑みを絶やさず指示を出す姿は鬼にしか見えない・・・

訓練内容はじつと座り続けるものから、
同じ型を延々と繰り返すもの、
ケイトに型を教わる・・・等様々だ。

しかし、それらどれもが凛を精神的にも体力的にも疲労させた
ということは言つておこつ。

時には鍛錬が終わるなり意識を失い、

ケイトがジョナスに「なぜか彼はやつを殺められたと言われてた。」

ケイトに一通り話ができるようになったことを
認めてもらえたまで、それは続いた・・・

よつやくケイトからお墨付きをもらい、

凛は次の武術の指導を受けたことになった。

服がいつもと違う

今までズボンは木綿のような素材で、

それに同じ生地のゆつたりとしたシャツだけであった。

靴もメイドが履いているものと同じような軽いもので、何かに対しても特化したような雰囲気は見受けられなかつた。

今日、準備されているのはいつもの服に加え、革のライダースジャケットのようなもの。

靴も編み上げブーツのようで、少し重い。

凛が心配したのは、この上着によつてでてくる体のラインである。

今までゆつたりとしたシャツだつたため

誤魔化せていたが、この上着は少しきついくらいで

しつかりとボタンを留めると体の線が露わになつてしまつたのだ。

さらしを巻きつけて男の体に近づけていても、

その華奢な体躯は隠せるものではない。

凛は誰かに見とがめられるのではないかと

戦々恐々しながらも、新しい訓練に胸を膨らませていた。

対してシェスは不満顔である。

訓練の間は部屋に籠つていなければならぬのだ。

前に出ようとしたところをジョナスに発見され、
酷い目にあつたらしい。

今までのケイトの指導の時も同じであつたため、
相当ストレスがたまつてゐるようだ。

「気にくわぬ。何故我がこの様な箱に閉じ込められねばならぬ」

ふんと鼻を鳴らしてベッドに

寝そべるシェスを宥めながら凛は着替える。

(終わつたら庭園へ行こう。それまで待つてくれ)

外出をしようとするが何故か三人から止められてしまつて、凛が
行くことを許された場が「庭園」である。

宿舎の裏にある空き地は庭園とは呼ばれているものの、
観賞用の草花の類は全くない。

凛と一緒にならばシェスも外へと出られるため、
人もあり来ず、自由に使えるこの空き地を
凛とシェスは運動場として利用していた。

「・・・うむ。早く戻つてくるがよい」

(わかつてゐる。じゃ、行つてくるから)

不満顔ながらも見送ると、言ひて尾を振るショスに
これが本当に氣位の高い精靈なのかと苦笑しながら
凛は部屋を出た。

* * * * *

ケイトのときと同じ森の中へと向かつ。
其處に居たのは

「レイー。」

「遅い。」

相変わらず不機嫌そうに腕組みをし、
木にもたれて此方を見ている。

もしかしたら見知らぬ騎士が指導官になるのではと
不安であつたが、無用であつたようだ。

見れば、レイの服も似たような上着にブーツだ。
ただレイのものは真新しい凛のものとは違い、
何回も着られたのか、こなれている。

「レイは何を指導してくれるんですか？」

「乗馬だ。行くぞ。」

「え、ど、ど？」「？」

凛が向かうなり、レイはさっさと森の奥へと歩き出す。

よく見れば、地面には獣道程度に「うつすり」と
草が踏み分けられた跡があった。

「厩舎に決まっているだろ?」

「馬を、選ぶ、んですか」

歩く速度も速いが、嫌味かと思うほどに足の長いレイに
置いてゆかれそうになつて凛は小走りになる。

「乗馬の経験は」

「ない、です」

舌打ちが聞こえた気がする。

しかし、これは仕方のない」とともいえる。

ケイトは一回も嫌な顔をしなかつたが、
それはケイトの表情に「微笑み」というものが標準装備されている
からだらう。

断じて慮めて遊んでいたのだとは思いたくない。

レイとしては、こんな坊主の指導よりも

一人で鍛錬でもしていたほうがよっぽど有益だらう。

「すみ、ません」

「何がだ」

レイは振り返らずに答える。

「レイモ、こんな、こと、したくは、ありますご、よね
「だから、謝るつと」

「俺は弓を放けた。だからやる。

「いけいけやいけいけ。」

凛は呆氣にとられる。

文句の一つでも言われるかと思っていたのだ。
しかし、氣を取り直してありがとうとほほ笑んだ。
ちなみに日本人の個性上、凛もほほ笑みは標準装備である。

(血りの言ひ声) おれのなら、
しっかりと練習に打ち込んで早くできるようならなければならない
と思巻く。

そのためか、レイの耳が僅かに赤くなっているのは気が付かなか
った。

そのまま歩くと急に視界が開ける。

厩舎は右側にみえる木造の建物だ。

目の前に広がる牧場のような草原で馬が草を食んでいた。

「おお、レイさんか。 今日はどうしたんだい?

今日は馬の口じゅなかろつ

此方へ向かつてきただのせおそらく厩舎番なのである。千し草を運んでいたよつで、ワゴンを押していく。

「ああ。ここでの馬を。」

「へえ。じゅうりの坊やとかい」

厩舎番は凛へと皿を向ける。

「うーん、こんなに細いのは久しぶりだねえ
今つ子は頑るかね」

厩舎番はワゴンを押しながら厩舎の中へと入っていく。
続いたレイに、慌てて凛もついて行つた。

し、進展が遅いですね・・・汗

馬房内は予想以上に広々としていた。

中に200頭以上は居るのではないだろうか。

一頭一頭のスペースも充分にとつてあり、

敷いてある藁は清潔で、

とても住み心地が良さそうだ。

「あとは頼んだ」

レイは迷いもなく前方へと歩いていく。
つこてこじつとする凛を厩舎番が止めた。

「レイさんは自分の馬のところに行くみたいですね
お前さんは馬を選ぶんだね?
ならつこてきな」

厩舎番はレイが行った方向とは違ひ、
右の細い通路へと入つていく。

凛は慌てて後を追つた。

「あつちはもう持ち主が決まつてる馬が居るといでね
じつちが選べる馬のこるとこね」

着いたのは一瞬見ただけでは先ほどと変わらなかった。しかし、先ほどは仕切りに名前のようなものを書いたプレートがつ

こちらにまつていいない。

おひりへ、あのプレートがその馬の所有者を示しているのだひつ。

いていた。

「じりじり選ぶんですか？」

「わうわな、選ぶところよりかは

騎士さんほ馬に選ばれるさ。」

これでは、某 頸に傷のある男の子の物語の中で
杖と同じではないか と凛は思つ。

「馬が、ここつを主人にしてもここと思つたら
その馬に乗れるんだ

認めてないやつが乗つても一個も従いやしない」

「一頭一頭触つて行つてみな

時間はあるだろ？」

その言葉に頷き、凛は前へと足を踏み出す。
一番近くに立た馬の鼻面に触れみつとする。

が。

「あつ

馬はこやいをするかのよつ

首を振り、馬房の後ろへと下がつて行つてしまつ。

氣を取り直し、進んでいくが

どの馬も似たような反応で、

もしかしたら馬に嫌われているのではないかと挫けそうにな。

厩舎番は既にその場を去つており、
凛だけが馬と向き合ひつ。

残り一頭となり、
もう黙りかもしれないと半ば諦めに入りながら
凛は手を伸ばす。

また、逃げられてしまうんだり

と、手に湿った何かが当たる。

視線をあげれば、円らな瞳が見つめ返していた。
強い意志を持つてこちらを見返してくるそれに
凛は時間が止まつた気がした。

(認めて、くれるのか)

【ええ】

思わず語りかけていたが、
返答があるとは思わず、思わず後ずさつた。

途端に声は聞こえなくなる。

おぞるおぞるもつ一度触れると、
あきれたような声が降つてくる。

【認めないほうが良かつたですか？

折角久しづぶりに認めてあげよつと思つたのに

】

「いや、嬉しい！」

「ありがとう。ありがとうー。」

「ん？見つかったのかい？」

声が聞こえたのか厩舎番が歩いてくる。
その顔は凛が撫でて居る馬を見て驚きの色で染まつた。

「や、そいつかい？」

本当に、それでいいのかい？」

他の厩舎まで行けば、もつと他に持ち主のいない馬は居たのかもしれない。

しかし、凛はこの馬に魅せられてしまつっていた。

空の様に優しい田。シェスと同じような艶々とした漆黒の毛並み。なぜか、この馬以外には自分の馬は居ないとまで思えた。

「ええ、いいんです。

この子が良いんですね。」

【それは光榮なことですね】

優しい田で馬を見つめ、言い切る凛、「一つため息をついて厩舎番は口を開く。

「…・わかつたよ。

おまえさんがそこまで言つたのない

「レイさんは外で待つてる。

道具を貸してやるからちょっと待つてな

厩舎番は外へと走っていく。

再び一人（一人と一匹）だけになり、
凛は鼻に触れて話し出す。

（本当に、ありがとう。
それで、名前を聞いても？）

【ノーライルです。
イル、とお呼びください】

少し誇らしげに名前を告げるイルに
笑みを浮かべる。

（イル、な。
これから直しく。）

【それで、不躾とは存じますが、
貴方は男性の方なのでですか・・・？】

困惑したような瞳を見て、
凛ははつきりと答えた。

（女だ。
訳があつてこんな恰好をしている）

【やはり、そうでしたか！
動物としての本能が何か違うと告げていましてね。
良かつた良かつた。
」のような方を主人にできるなんて幸せだ。】

むを苦しい男共が来ても従わなくて良かつた
あの汚らわしい手に触れられるかと思うとぞつとする

】

(・・・イル?)

【 あのような虫けらなど

おつと、これは申し訳ございませんでした】

途中から素の部分が垣間見えた気がする。

だがここは見て見ぬふりをするのが日本人の美德といつものである。

(・・・自分は一回も乗馬経験はないんだ。

大丈夫だろうか?)

【心配は無用に御座います。
全身全霊サポートいたします】

そのままイルに乗馬時のコツなど教えてもらひ。
一通りの知識を頭に詰め込んだところで
厩舎番が大儀そうに何かを運んでくる。
おそらく、鞍や鐙の類だろう。

まだつけ方は分からなかつたため、
厩舎番に教わりながら取り付けた。

準備が終わり。

よつやく凜は、レイが居るという訓練場へと向かつた。

凛を送り出した厩舎番はため息をついた。

あの馬は、前の持ち主が戦死するまでは引く手あまたの名馬であった。

しかし、それ以外の騎士には見向きもせず、
時に攻撃することさえあつた。

このまま、厩舎の隅でくたつてこくのは勿体がないとは思つていた。

しかし、あのよつじに細い子の手におえるだらうか。
時の戦神を勝利へと導いたあの馬を。

だが、どうせ今までと同じように振り落とされてしまうだろう。
その時はまた新しい馬をつれてきてやる。
ひとまず、あの子が音をあげて逃げ帰つてくるのを待とうぢやない
か。

そんなことを考えながら

訓練場へ向かつた厩舎番が田にしたのは、
想像とはかけ離れた光景であつた。

昨日は、やはり家に帰つたら気が抜けてしまい、投下できませんで
した・・・

レイは既に場内を走っていた。

否、その姿を見るならば、「飛んでいる」と表現するほうが相応しいかもしない。

軽々と障害物を飛び越し、颯爽と駆けぬける様は見惚れるほどに美しかつた。

「馬は選んだか」

「ええ、この子です」

凛たちに競りていたのか、並足に変えて此方へとやつてくる。

「なら、早速乗つてもらひ。

経験は、無いんだつたな？」

「・・・御恥ずかしながら」

そこから基本的な馬具の名称、

乗るときの注意、「ツンなどを乗りながら教わり、

凛はすぐに乗れるようになつていた。

とは言つても、運動が得意といつ訳ではない凛がこのように直ぐに慣れられたのは、ひとえにイルのおかげだらひ。

【大丈夫ですか？】

【揺れがきつくなありませんか？】

先ほどからずっとこのように気にかけてくれている。
因みに、敬語なのはやめてほしいと頼んでも
無下に断られてしまった。

凛もレイやシェスに対しても言葉を崩せずにいるため、
あまり強いことは言えず、そのまま落ち着いた。

（大丈夫、ありがとうございます）

とは言つてもイルは優しく、
技術的な面でもパートナーとして最高だった。

さつきまではだく足でゆっくりと場内を廻っていたが、
レイのお許しも得て、駆け足で走つてみることにした。

頬を撫でる風が心地よい。

気を引き締めねばならないのは分かつてゐるが、これから的生活への不安、「戦い」と言う行動への恐怖、

そういうものを全て忘れ、一時この風に身を預けて 只々走つてい
たかった。

と、田の前にウサギが横から飛び込んでくるのが見えた。
森から迷い込んだのだろうか。

円らな瞳が此方を見る。

今は駆け足。

いくらイルと言えど、急に止まることはできない。
そのまま棹立ちになる。

手綱を掴もうとした手は空を切る。

凛は衝撃に備えて身を固くした

あいつには本当に驚かされる。

選んできた馬を見たときは見間違いだ、とセミ思つた。

俺が一度も触れることのできなかつたあれを、

「あれ」を、手馴けたと言うのか。

だが凛を見る知性に溢れたその目には、
敬愛と服従の意がみえる。

その思いは本当なのだろう。

初めは大抵馬との思いが通じず、初っ端からあのよつに軽々と走ることなどできない。

あの馬は流石、と言つべきなのか、
リンの動きをフォローして上手く乗せてやつている。
リンも馬を信頼し、身を任せている。

駆け足を許し、思わず見て言葉を失つた。

鬚をなびかせ、筋肉を躍動させる青毛の馬を、凛々しく御するその姿。

パズルのピースの様にぴったりと馴染んでいた。

なんだか神聖なようなものに思え、声を掛けるのをためらわれた。

だが、そろそろ戻らねばならない時間だ。

呼ぼうとして、田にしたものに馬を駆けさせた。

いへりあの馬が優秀だとは言つてもリンが落ちることは免れない。

間に合ひつかつ

横から必死で差し出した腕にそれはぱすっとおれたつた。

落ちると思っていたのか、体がかたい。

違和感を感じたらしい、目が明く。

自分が俺の腕の中に居るのに驚いている。

体を更に小さくして、慌てて何度も謝つてくる。

あれは仕方がなかつた、お前のせいではないと何度も言つてもすまな
そうに顔を曇らせている。

リンの馬を呼び、馬から降りてリンを地面に下した

「うう」

聞こえるか聞こえないかの小さな声をとひらべる。

何でもないと頭をふるリンを捕まえ、足の様子を見る。

あの様子からすると足首だらつ。

思つた通りそこは熱を持つて腫れていた。

おそらく落ちる時に足が引っ掛けたのだ。

「これでは到底宿舎まで自分の足で歩へことはできないだらつ。

そう判断した俺はリンを横抱きにする。

いわゆる「お姫様抱っこ」というやつだ。

この形が一番患部にも、俺にも負担がかからない筈だ。

慌てふためき、「重いからおろせ」とわめくリンは、

「の足で帰れるのかと返すと言葉を詰まらせてくる。

しかし、本当に軽い。

発達途上とはいえ、あまりにも細く、小さすぎる。
あつてこの体は片腕でも抱えられる。

ふと、ここには本当に男なのだろうかと思つ。

上目使いで見上げる潤んだ瞳。

羞恥で染まった頬。

華奢な体は力加減を間違えれば壊してしまった。

今は諦めたのか、恥ずかしそうに俺の胸元に顔を埋めている。

乗馬服を握りしめる小さな手は庇護欲をそそつた。

髪から見え隠れする細い項に顔を近づけて香りを嗅いでみたくなる。

そのような趣味があるのは知っているが、俺にはないはずだ。
しかし先ほどの姿を見て感じたものはなんだ？

「硬派」として名が通つてゐる俺とて恋愛経験が少ないわけではない。

幼いころは青臭く胸をときめかせもしたし、

大人になつてからの駆け引きを楽しんだこともある。

自分の思いに気づけぬ程、初心ではない。

だが、その経験が声高に叫んでいる。

先ほどの思いは、「恋」だと。「欲情」なのだと。

そんなはずはない。

「こつは男で、俺も男で。

そんな風に心に理論で蓋をした。

ただ、この体に今しばし触れていたい、この穏やかな時間に浸りたい、と思つてゐることには気づけなかった。

少し遅れてしまいました(汗

気が付くとそこは既に自室のベッドの上だった。
運ばれている内に寝入ってしまったようだ。

宿舎の部屋は「パーティーハウス」といって、一室である。
だが、一部屋一部屋が家のようであり、
小さくとも各自のスペースのような空間が割り当てられている。
リビングのような部屋もドアを入れるとすぐにあり、
打ち合せや来客スペースとして用いるのだらう。

ゆっくりと体をおこすとショスがぽんと飛び乗ってきた。

〔気分はどうだ〕

(全然大丈夫。 ありがとう)

窓の外を見れば真っ暗闇で、相当な時間眠っていたのだらう。
その間、ずっと見てくれていたのだらうか。

(・・・「ねん」)

〔当然のこととしたままで〕

そうだけ答えるとショスはベッドの上で丸くなる。
喉が渇いているのに気づき、机に乗っていた水差しからレモン水を
飲んで、再び横になる。

折角、新しいことに取り組めると思つていたのに

初日から失敗してしまった。

この感じだと、暫く実習は不可能だらう。
ずっと、お世話にばかりなつてゐる。

早く何かしたい、世話をしてもらうだけではなく、自分も役に立つ
たい。

そんな想いだけが募つていて。

使命とか、義務とか。

そういうのを求めていたのかもしれない。
此方の世界で、生きるために指標になるよつた。

するりとシエスが布団へともぐりこんでくる。
頬を舐められて、凜はくすぐつたくて声をあげて笑つた。

「落ち着け。今、できるひとを考えるべきであらう」

心中を見透かされている気がした。
すうつと焦りが、熱がひいていく。

枕元に座りなおしたシエスの毛並みを整えながら考へる。

今、の自分に、できることは・・・?

気持ちばかりが急いでいたことを恥じた。

こんな状態ではできるものもできないだらう。

己の現状を嘆くのではなく、それを踏まえてどうあるべきか。
分かつっていたはずだったが、忘れてしまつていていたようだ。

明日、何をしようか。

そんなことひらひらと考えているつか、元気についた。

凛が完全に眠ったのを確認して、人影がむくりと身を起こした。
目は金色、髪は漆黒。
シェスの人型である。

「本当に、手間のかかる生き物よ」

言葉は乱暴だが、凛の顔にかかった髪をはらつ手は慈愛に満ちている。

いつものように精霊界で退屈ではあるが、平穏な毎日を暮していた。
精霊の中でも上位に位置するこの精霊には、人間界の度の過ぎる不
調や、
混乱を直す役目を持っていた。

人間などつまらぬ存在。

なぜ、お互いを憎み、疎み、殺しあう必要がある。
その刹那にも等しき一生の中で。

人間と言つ種族が理解できなかつた。
嫌いだつたのではない。

只々、なぜそんなにも負の感情を持ち得るのか不思議だつた。

何度か人間の精靈術師とやらに召喚されたこともある。
だが、みな欲にまみれていた。

表向きは聖人君子だらうとも、精靈のその身に誤魔化しは効かなかつた。

契約はことじごとく断つてきた。

一瞬良いと思えても、次の瞬間には人間の奥底が見えて、辟易せざるをえなかつた。

そんな折、久しぶりに召喚を受けた。

この身を呼ぶには相当な力を必要とする。

そんなにしてまで、どうして我を求める?

しかし、喚ばれれば行かねばならぬ。

仕方がなく、重い腰をおこし、精靈界と人間界の狭間へと足を運んだ。

其処に居たのは一人の少女だつた。

初めは姿を見せずに人間側から呼びかけてくるのが普通だ。

しかし、少女は知らないらしく、何もない空間の中で瞳をさまよわせていて。

欲しい、と思つた。

この少女の魂は深く傷ついていた。

しかし、それ以上に、神々しいまでに透き通り、輝きを放つていた。

このような魂を持つものなど、今までに見たことがなかつた。

初めて、精靈は人間と話したいと願つた。

「普通」を無視して此方から呼びかける。

どこから声が聞こえるのか不思議なのだ。ひづ。
きよときよとと辺りを見回している。

ほほえましい姿に頬が緩みそうになるが、ここには威儀を保つべきだ。
再び問い合わせれば、誰かと問いつてくる。
本当に知らなかつたのか。
力を欲するか、と聞けば輝く瞳で貸してくれと頼んできた。

本当に、不思議な娘よ。

メイシエスと名付けられた。

不思議と、それがもとからの己の名前であつた気がした。

真名も、心も、すでに少女に捕らわれていた。

少女の前に姿を現す。

瞳に映つてゐる黒豹をみて、己の姿を初めて知つた。

その少女はある時の威儀はどこへやら、幼い寝顔を無防備にさらしてゐる。

夢を見ているのだろうか、うなされて汗ばんだ小さな手を握つてやれば、顔は華の様に綻ぶ。

ビヒリでもあるよつた、小さな命だ。

だが、今はかけがえのない存在でもある。

憎悪と嫉妬にまみれたこの世界に、おいておきたくないと思えるほどに。

リンよ。我に世界を、そなたの瞳からみる世界を、教えてくれ

一匹と、一人の夜は更けていく。

今回は少し短めです。
閑話的な雰囲気。

「今日は私よ！」

「いいえ、あなたはこの間行つたでしょ！？」
「今日は私！」

「あなたたち何を言つて居るの、私に決まつて居るでしょ！」

「いい加減になさい」

「……メイド長様……」

「主様をお慕いするのは結構ですが、仕事に影響が出るよつてありますば、

一度と御前に出られないよつても出来るのですよ

「……も、申し訳ござりません……」

メイド長はため息をついてメイドたちの部屋を出た。
メイドたちの四下の話題は、最近入団した騎士のことだ。

「ケイト様も王子様のよつで素敵だわ」

「あら、レイ様だつてあのクールな感じがかつてこのよ
「でも今はやつぱり……」

「……リン様よね……」

メイドたちは、「騎士様ランキング」を内々に作つてゐるらしい。
今までは不動の一位と二位としてフォール・レイチエルとケイト・ラメリアが君臨していたのだが、

「最近人気が急上昇しているのが「リン・シノハラ」である。

先日怪我をして鍛錬に参加できなくなつたようで、よく宿舎内の散歩や庭園に日向ぼっこに向かつてこるのでよくみかける。

入団してからパーティーの面々が外に出るのを許さず、口裏合わせのためで本当は居ないとか、あまりにも実力がないことが判明したのだとか、様々な憶測が飛び交っていた。

しかし、今回の怪我で騎士団の土地内なら歩くのを許されたらしく、メイドたちもよひやへ歩ひなどができるようになった。

そして、噂はあつという間に立ち消えになつた。なぜなら・・・「もひびこの方でも構わないわ〜」とメイドたちが骨抜きになつてしまつたからで。。。。

(確かに騒ぐのも無理はないと思ひナビ・・・)

シノハラはこの国ではあまりみかけないような風貌をしてくる。異国風の顔立ちに、珍しい黒髪黒目。

出自も、孤児のために不明で、神秘的。年齢も幼く童顔で、「守つてあげたくなる」らしい。

だが、人気の理由はそれだけではないらしい

「あの、すいません」

「は、はい何で? やじましょ?」

声を掛けられたが気づくのに遅れてしまい、動搖しながら礼の形をとる。

「えつと、風の庭園に行くのはいかでいいんですね？」

「おひしゃる通りで」

「お恥ずかしながら、道には迷いややすいんです」

「ありがとうございました」とひょこひょこと足を引きずりながら去っていく背中を見て、メイド長は複雑な表情になる。

人気のもう一つの理由は柔らかな態度である。

騎士にはその身分故に驕ったり、傲慢になつたりして使用人たちに横柄な態度をとるものも少なくはない。そのなかでシノハラは何かするたびに「すみません」「ありがとうございます」と礼を伝え、決して怒りちらしたりすることもない。

ケイト・ラメリアの妖艶なものとは違う、朴訥としているながらも優雅な物腰。

一時は、どこかの王族なのではないかとやえ噂も流れた。

しかし、そのようなことはメイド長に関係はない。

どのような人物であつても忠誠を尽くすのが使用人の定めである。

だがそのようにいかないのも人間であり……

メイドたちがここそと柱の影を動いていくのが見える。

今日もまた、お茶や「華」を渡して行くのだろう。

(他の仕事をしつかりやつてくれれば問題はないのだけれど)

メイド長は何回田になるかわからないため息をついた。

凛は風の庭園のベンチで口向ぼっこしながら本を読んでいた。
どうこう風の吹き回しか知らないが、急に外に出てもよくなり、
部屋にじっとしているのが苦手な凛は「こづして散歩に出向いている。
シエスと訓練に使っていた嘘っぽいの庭園とは違い、
本当に花咲き乱れるというような表現がぴったりの庭園が、土地内
にはちやんとあるらしい。

「華」「空」などあって、此処はその中でも凛のお気に入りの「風」
の庭園だ。

他の庭園よりも落ち着いた雰囲気で、花の香りも控えめだ。

んー、と一つ伸びをする。

この間までマナー地獄や、ケイトに「こづけ」かれていたのが嘘の様に平
和だ。

最近はメイドさんたちが何故か差し入れやお茶を持ってきてくれる。
くる時間も場所も不定期なのに、ビーフやつてみつけているのだろう。

凛は首を傾げる。

メイド長の気苦労も、凛には知る由もなかつた。

19 (前書き)

番外編のようなのですが、とりあえず本編として投稿します。
凛の馬、イル視点。

「貴方はよく毎日飽きませんね」

【主】そ、この様に閉じ込められてよく逃げ出せうと思わん」と

呆れて苛立つているような調子で話すイルの柵に、シェスは気にした風もなく飛び乗る。

此処は主の決まっている馬の馬房。

毎日凛が居ない間に、シェスは人々の目をかいぐぐってこうしてやつてきていた。

凛は、このことは間違いなく知らない。

ばれてしまえば、大切な主に心配をかけるのは分かっているが、それよりも持て余した時間をつぶす方がシェスにとつては比重が大きかつた。

イルもまた、言葉ではこいつは言つてているが、乗り手の近況が聞けるのは有難いことであった。

あの「戦神」とよばれた男以来、初めて受け入れた新しい、乗り手である少女。

事故であつたとはい、怪我の要因の中にはイルも含まれている。勿論、リンが自分を責めないことなど、その人柄をみればわかつてはいるが、怪我したことにより馬房にも来れなくなり、イルは不安を感じていたのだ。

規則を守つていないと評価できなかつたが、シェスの話をきいて、その自責の念が和らげられていたのも、また事実なのである。

シェスは「使用者たちが凜に母性本能をくすぐられている」という話を滔々と語り続けている。

あまり興味も湧かず、適当に相槌を打ちながらイルは自分の世界に入つてゆく。

イルの前の乗り手は、屈強な戦士であった。

よく言えば豪胆、悪く言えば単純で、だがそれゆえに人々をついてゆかせるような何かを持っていた。

イルもまた、男に魅せられた一頭であった。

男が死んだときにはひどい喪失感に襲われたものだった。

あの無骨な手で、労わるように梳かれるのは、一度とないのだ。

その時からイルは気性が激しくなり、人を近づけなくなつた。

男が生きていたときには「世紀の名馬」とまで呼ばれ、落ち着いた性格で幼子にも懐かれていたのに。

毎年毎年、新しい騎士たちがやつてきて見向きもしなかつた。

あの男はもっと鍛えられた体をしていた

あの男はもっと器が広かつた

あの男はもっと魂が輝いていた

あの男は…

いつも比較しては難癖をつけ、誰一人として選ぼうとしなかつた。たまに無理やりにでも使えさせようとしたものもいたが、そのような人間はイルの名声にだけ気をとられ、心はひどく濁り切つていた。そんなイルを世間は忘れてゆき、いつのまにか馬房の薄暗い隅がイ

ルの定位置となっていた。

あの男に勝てるような人間でなければ、乗せてやる」などしない

それは、より強いものに従いたいといった、プロ意識のよつなもののからきて「い」と言つても良かつた。

だが、そんなものではないことはイルにも分かっていた。
男は、イルが脚をうたれ、体制を崩したところを討たれた。
怖かったのだ。

自分のせいでの、また乗り手がいなくなる。
また、あの喪失感に襲われなければならない。

自分の弱さと向き合えないまま何年かが過ぎて行つた。

ある日、新しい騎士がやつてきた。

季節外れにやつてきたそれに、イルは興味を持った。

見るくらにはしてやつても

そうして、徐々に近づいてくる騎士を見て、その魂の強さに囚われた。

傷ついても、なお輝く光。

此方をみつめる瞳は、どこまでも澄んでいた。

即座に仕えることを決めた。

今までの暗い、底なしの想いさえも、この人に仕えたいといつ意志の前では何の意味もなさなかつた。

だが、あれはあまりにも軽すぎる。

彼女は男のふりをしていると言っていた。

だが自分之上に乗った時に、あまりの軽さに本当に乗っているのか確認しようかと思つたほどだ。

少年のふりをするのには、あまりにも華奢すぎるのではないかだろうか。

しかし、無事でよかつた。

あの時、また乗り手を失うのかと思って絶望に陥りそうになつた。だが、捻挫だけで済んだとシェスから聞き、安堵し、また暗闇の中へと入りかけていた心を引き返せることができた。

「この獣は、何を考えているのだろうか。

ふとそんなことを思つて、シェスのほうを見る。

それは、リンに使えるもの同士としての好敵手意識のよくなものだつた。
ライバル

リンの近くに居られることに対する嫉妬も交じついていたかもしれない。

シェスはまだ、リンが使用人を虜にしているといつ話を熱っぽく語り続けていた。

ああ、これもまた、あの人に囚われているのだ。

シェスの目を見て、確信した。

彼の、リンに対する愛情の前では嫉妬など無意味だった。

彼女は、この気位の高い精霊でさえも引き付けてしまつたのだった。

あの人は、何もかもを変えてゆく

きっと、彼女が望むと望まないとに関わらず、彼女の周りには嵐が
まきおこるのだろう。

これから起ころるであろう「」とにイルは思いを馳せた。

落馬してから時間も経ち、凛の怪我は治つていると言つても良い状態ではあった。

しかし、ミーナの「まだ運動をするには時期尚早」という診断により、

凛には身体の異状による強制欠務ではなく、一時的な休暇のようなものが与えられていた。

凛としてはもう始めて大丈夫だという感じはあつたし、早く後れを取り戻したいという気持ちもあつた。

だが、訓練させてもらおうとミーナに許可をだすよう訴えても、「訓練は健康状態の完全なものしか行つてはならない」という規則があるのだ、と言われば引き下がるしかなかつた。

怪我が酷かつたころに散策は粗方終わり、散歩はそろそろ飽きてきていた。

訓練もできず、凛は暇を持て余していた。そこに、ジョナスの提案があつた。

時間があるのならば、知識を再確認してみてはどうか、と。そこまで凛は、勉強は嫌いでもなかつたが、好きな方でもなかつた。そのためにその選択肢は見て見ぬふりをしていたのだが、言われてしまえば無視することはできない。

だが、実際言つてもらえて良かつたと本を読みながら凛は思つ。短期間で詰め込んだ知識には穴が多く、またこの世界で常識となつているような事柄も抜け落ちていた。

異なる世界から来た凛にとっては馴染のないものが多く、頭が受け

付けていなかつたのだろう。

今は国と国の関係についての文献を読んでいる。

凛は何度も読まれたのか、開き癖のついたページを広げる。

今居るフェルタイル国についての記述だ。

領土は小さいが、豊かな土壤と、進んだ魔術の研究、更に賢王の政治により、

国民は水準の高い暮らしを営んでいる、と書かれている。この辛口な文献としては、かなり高評価の記述である。

(落ちたのが、フェルタイルで良かつた)

もし、あまり治安の良くない国などに落ちてしまえば、実感はわからないが、奴隸商人やその類の商人はいるはずだ。もつとも、容認している国は少なかつたはずであるが、どの世界でも法の目を掻い潜つて利益を得ようとすの輩は居るようだ。

右も左もわからなかつた落ちてきたばかりの凛なら、騙し、売り飛ばすことなど赤子の手を捻るより簡単だつただひつ。

その他にも国は30個程度はあつたがもともと地理の得意ではない凛は、どんどんページを繰つていく。だが、その手がある頃でひとりと止まつた。

前にジョナスから注意してほしいと言われたエンビヒエ国の部分だ。この国は度重なる侵略を繰り返し、今では最も大きな面積を誇る。だがそのような輝かしい情報とは反対に、

王はお飾りと化し、役人たちが市民から重い税を徴収して蜜を吸つてゐる、

公共設備は整つておらず、治安も衛生も悪いとある。

その下には属国にした国には、更に重い税を強いたり、

その国の研究や文化を取り上げてしまつとまで書かれていた。

エンビヒエ国には研究者や魔術者が少ないらしく、

属国の魔術者たちは強制的に軍に入隊させられるようだ。

何もこの文献だけが情報のすべてではないが、

これほどまでに書かれる国とはいつたいどんな状態なのだろう、と
凛は眉根を寄せた。

フェルタイルが安全なのは、国境をエンビヒエ国と接していないこと、
とど、有能な騎士団があるからだ。

もし、その強みがなければ、小さなフェルタイルなどあつという間に
飲み込まれてしまうだろう。

そんなことはさせない、と凛は強く思う。

せめて、この国立騎士団に入ったのだから、少しでも恩返しがしたい。

日々に考えながら読んでいると、外から使用人の軽やかな笑い声が
風に乗つて運ばれてくる。

窓を開けて下を覗けば、いつも見るような制服ではなく、
鮮やかな色彩を纏つて三人ほどで歩いているのが見えた。
手に袋をたくさん提げているところをみると、

今日は休みで友達と買い物に出かけた、といったところだろうか。

未だ騎士団の本拠地から出したことのない凛は、街並みに想いを馳せ
る。

人と人が触れ合つておくるざわめきの中に身を置くのは心地が良かつた。

だが、女性としての楽しみはなくなるだろう。
買い物などが特別好きなわけではないが、

あちらに居た時に、学校の友達と他愛もないことを話しながら町を歩くのは好きだった。

こうした形で騎士団に入った以上、女性の、しかも同年代の友達など、できるわけがない。

いいところで、少し年上の、男友達といったところだひつ。

それでも

(いつか、町に出たい)

声を弾ませて、戯れながら歩き去っていく使用者を、凛は見つめた。

あとがきは活動報告で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8580w/>

騎士と鈍感っ子（仮）

2011年11月30日21時17分発行